

昭和五十二年八月二十五日発行

萬葉學會

赤人における叙景形式の変遷……………清水克彦(一)

——仮称「原赤人集」の構造から——

上代における道祖神の呼称について……………井手至(三)

ヌバタマの語源……………田中みどり(三)

予告……………(三)

「国文学研究資料館」利用業務開始のお知らせ……………(三)

萬葉學會會員名簿……………(別一)

萬葉

第九十五號

昭和五十二年八月

第九十四號目次

古事記「訓読」の論……………西宮一民

祈年祭祝詞についての一考察……………粕谷興紀

黄葉片々

赤人の春雑歌四首について……………清水克彦

「おぼのびに」と「とぼしろし」……………森重敏

——付けたり、「をぐきがきぎし」——

書評

北山茂夫著『續萬葉の世紀』……………東野治之

赤人における叙景形式の変遷

——仮称「原赤人集」の構造から——

清 水 克 彦

山部赤人の作品における、景の叙述への導入部には、大別して次のような二つの型が存在する。すなわち、その一つは、たとえば富士山の歌（卷三・三一七）における「……駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放^きけ見れば……」のように、「……を見れば」と述べて景の叙述に入る型であり、もう一つは、たとえば吉野讚歌（卷六・九二三）における「やすみしし わご大君の 高知らず 吉野の宮は……」のように、「は」で直接に場を提示してその場の景を叙述する型である。そして、赤人の作中、景の叙述への導入部を持った全作品を対象に分類を試みると、次のような結果が得られる。

見れば型——卷三・三一七、三一八、三三二。卷六・九四二。

は 型——卷三・三三四、三七八。卷六・九三三、一〇〇五。

「見れば型」の内、三一七、八は富士山の歌、三三二は「伊予の

赤人における叙景形式の変遷

温泉に至りて作る歌」である。九四二は「辛荷^{からに}の島を過ぐる時」の作で、この歌については、直前に載せられた金村作（九三五―七）や赤人作（九三八―四一）とともに、神龜三（七二六）年、播磨の国印^{いなみの}南野行幸從駕の際の作と見る説があるが、金子氏の『評釈』が作中の地名からこれを否定し、『全註釈』や『注釈』がむしろこれを伊予下向時の作と見たのに従うべきものと思われることは、すでに別稿^①で述べたところである。

とすれば、「見れば型」の歌はすべて東国、および伊予下向時の作、またはそう推定される作ということになる。そして、「は型」の歌には、東国、伊予関係の例がない。

わたくしはこの事実を、両者の作歌年代の相違を意味するものと考え。さらに具体的に言えば、赤人が東国、および伊予に下向したのは、彼の作歌活動の初期であり、彼は「見れば型」から「は型」へと移って行ったものと見るのである。

もつとも、萬葉集の資料となった赤人の作品集には、作歌年月に関する注記を欠いていたらしく、萬葉集でも、彼の作品にはその注記を欠くものが多い。「見れば型」の全例、すなわち、東国、伊予関係の諸作品もその一例である。従って、右の私見は、一見してただちに了解される事柄ではなく、さまざまの角度から論証しなければならぬ事柄である。以下に、わたくしの描いた「赤人における叙景形式の変遷」図について、能う限りの論証を展開し、もって読者の御批判を得たいと考える。

二

前節で述べた二つの型は、いずれも、主として国見歌、またははめ歌の型として、すでに歌謡の中に例が見出される。すなわち、「見れば型」の例としては、

○千葉の 葛野を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見

ゆ (記・四一、紀・三四)

○おしてるや 難波の埼よ 出で立ちて 我が国見れば 淡島

淤能碁呂島 檳榔の 島も見ゆ 佐気都島見ゆ (記・五三)

○埴生坂 我が立ち見れば かぎろひの 燃ゆる家群 妻が家

のあたり (記・七六)

などがあり、「は型」の例としては、

○大和は 国の真秀ろば たたなづく 青垣 山ごもれる 大和しうるはし (記・三〇。紀・二二もほぼ同じ)

○巻向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日影る宮
竹の根の 根足る宮 木の根の 根蔓ふ宮 八百土よし
い杵築の宮 真木さく 檜の御門 新菅屋に 生ひ立てる
百足る 楓が枝は 上つ枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を
覆へり 下づ枝は 鄙を覆へり 上つ枝の 枝の末葉は 中
つ枝に 落ち触らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に
落ち触らばへ…… (記・一〇〇)

○こもりくの 泊瀬の山は 出で立ちの よろしき山 走り出
の よろしき山の こもりくの 泊瀬の山は あやにうらぐ
はし あやにうらぐはし (紀・七七)

などが数えられる。

萬葉集に入って、まず想起されるのは、萬葉の開卷第二に置かれた、あの有名な舒明天皇の国見歌であろう。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち
国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ う
まし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は (巻一・二)

言うまでもなく、これは「見れば型」の歌であるが、この歌は、おおむね次のような四つの部分から成り立っているものと考えられ

る。

(1) 国見のために立つ場に対する讚美の叙述(「とりよろふ」まで)

(2) ある場に立って国見をするという作者の行為の叙述(「国見をすれば」まで)

(3) 見た国土の景に関する叙述(「鷗立ち立つ」まで)

(4) 見た国土に対する作者の讚美の情の叙述(終まで)

先に掲げた「見れば型」の歌謡の中で、この構造にもっとも近いのは「おしてるや」の歌(記・五三)であろう。「難波」の枕詞「おしてるや」を、枕詞本来の性格にかんがみて「難波」の讚辞と見れば、この歌謡は、(2)(3)の叙述を要素として完備しているのみならず、(1)の叙述をも含んでいるものということになる。

しかし、ここには(4)の、見た国土に対する讚美の情の叙述が見られない。また、(3)に該当する部分は、見えた島の名をたんに羅列しただけで、これを景の叙述と呼ぶにはあまりにも素朴である。すなわち、この歌謡は、舒明天皇の国見歌に比して、叙景と抒情の両面でなおきわめて素朴であると考えられるが、ほぼ同様のことは、「見れば型」の他の二つの歌謡についても言いうるであろう。

叙景、および抒情という面では、「は型」の歌謡の方が一步先行しているものようである。先に掲げた「は型」の三例は、いずれ

も、提示した場に対する景と情の叙述に主眼が置かれ、しかも、

「見れば型」には見られなかった「うるはし」(記・三〇〇〇紀・二二〇)、
「よろし」、「うらぐはし」(以上紀・七七)などという、場に対する歌い手自身の讚美の情をあらわした語を含んでいる。

「見れば型」と「は型」とは、本来別個の目的を持った歌謡だったのであるだろうか。

「見れば型」の三例の内、はじめの二例が、さらに何度も「見ゆ」と念を押していることから推測されるように、この型の歌謡の歌われる場では、歌い手の、国土を見るという行為そのものに重要な意味があったものと考えられる。それは、すでにしばしば言われているように、見るものが国土の領知を意味するという、いわば呪的な意味であろう。従って、この型の歌謡では、「……見れば……(見ゆ)」と述べるところに眼目があり、景を叙したり、その場を讚える情を述べたりすることは、本来不可欠の条件ではなかったのである。

対して、「は型」の歌謡では、景や、その場に対する讚美の情の叙述に主眼が置かれている。そして、前掲の第三例で、「こもりくの 泊瀬の山は 出で立ちの よろしき山 走り出の よろしき山」と、景の叙述の中に讚美の情をあらわす語の侵入しているという事実が端的に物語っているように、この型の歌謡に歌われた景

は、実景であるよりもむしろ歌い手によって讃えられた景である。これもすでにしばしば言われているところであるが、本来この型の歌謡は、国土や建物などを讃えることによって、その言葉通りの繁栄をもたらそうとする、言霊信仰に支えられた呪歌だったのである。だとすれば、讃美の叙述は、歌い手の願い、理想とする国土像や建物像の進展にそくしてますます進展する。ここに、この型の歌謡において、讃美の情に支えられた叙景表現や、讃美の情の表現の成長する契機があったのである。

語の厳密な意味において、本来前者は国見歌の、また、後者はほめ歌の型であったと思われる。もっとも、ほめ歌といえども、そのものを見て歌うのがたてまえだから、「見れば型」に従いつつ、(3)の部分に、讃えられた景や、場に対する讃美の情を述べることによって、これをほめ歌として用いることもできるし、むしろ積極的に、歌い手がそう見たと宣言することが、対象の繁栄を促進する効果を持つと見られたということも考えられよう。また、見ることを歌い手の行為にゆだねて、言語表現としては「見る」の語を持たない「は型」に従っても、これを国見歌として機能させることができなわけではない。事実、そういうこともあった筈で、その意味での二つの型は、それ程明確に役割を分担しているわけではなく、むしろしばしば通用されたかと思われるが、ここでは両者の表現にそ

くして、その本来の役割を推定してみたのである。

この観点から言えば、舒明天皇の国見歌は、「見れば型」に従いつつ、本来「は型」の歌謡が主眼とし、そこで成長していた、讃えられた国土の景と、国土に対する讃美の情の叙述を取り込むことによって成立したものである。天皇の作であるから、本来国土の領知を意味した「見る」の語を持つこの「見れば型」はきわめてふさわしいが、国土の領知は、開巻第一に置かれた雄略天皇の作における、「そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ居れしきなべて 我こそ居れ」が、きわめて強い気迫をもって、すでに明確に宣言しており、この方はむしろすでに我が国土であるところの、大和の繁栄を予祝する、いわゆる国ぼめに重点が移っているもののように思われる。題詞には「望^く国^にしたまふ時」とあり、歌詞にも「国見をすれば」とあるが、先に述べたような方向で、ここでは国見の意味がすでに幾許か変質しているものと見るのである。

ともあれ、萬葉集は「見れば型」で出発した。そして、赤人以前の時期において、少なくとも本来儀礼的な性格を持つものである長歌では、人麻呂の「讃岐の狭^さ岑^{みね}の嶋にして石中の死人を見て」作った歌(巻二・二二〇)の、景よりも讃美の情を直接に述べようとした冒頭部の叙述に見える「玉藻よし 讃岐の国は」の例を除いて、たとえば人麻呂の吉野讃歌(巻一・三六、三八)でも、作者未

詳の「藤原の宮の御井の歌」(巻一・五二)でも、いずれも「見れば型」が踏襲されている。これらにおいて、国土を選び、また、国見するのはいずれも天皇で、天皇讚美の情をあらわすにはこの型が有効だったからでもあるかと思われるが、萬葉前期の儀礼歌では、「見れば型」が主流をなしているのである。

三

赤人の作中には、基本に「見れば型」を踏まえつつ、これを或る方向に向かって変形したと思われる叙述を持つものがある。

みもろの 神なび山に 五百枝さし 繁しじに生ひたる 榊つがの木の

いや継ぎ継ぎに 玉葛たまかつら 絶ゆることなく ありつつも やま

ず通はむ 明日香の 古き都は……(巻三・三二四)

これは「神岳に登りて」の作の前半で、結果的には「は型」の歌であるが、この歌の冒頭部には、「みもろの神なび山」における、「榊の木」や「玉葛」の生氣にあふれた生成のさまが述べられている。ところで、この「みもろの 神なび山」は、題詞に言う「神岳」のことで、従って、それは赤人が「登りて」「明日香の 古き都」を見た場である。とすれば、これは前節で舒明天皇の国見歌にそくして分析した、「見れば型」の歌における(1)の部分、すなわち「国見のために立つ場に対する讚美の叙述」に根ざすものとは言え

赤人における叙景形式の変遷

ないであろうか。

しかし、赤人は歌詞の中で、「みもろの 神なび山」を、「明日香の 古き都」を見る場として位置づけてはいない。むしろこの冒頭部の叙述は、そこに述べられた「榊の木」と「玉葛」の語を契機として序詞化し、結局は「明日香の 古き都」の修飾部となっている。この歌では、「明日香の 古き都」に関する叙景の方に、表現が集中されているのである。

舒明天皇の国見歌において、(1)に該当する部分は「大和には 群山あれど とりよろふ(天の香具山)」であった。多くの場の中からとくに一つを選んだと述べてその場を讚える叙述は、「見れば型」の(1)の部分にはかなり例が多く、たとえば人麻呂の吉野讚歌(巻一・三六)がそうであり、赤人自身も、「伊予の温泉に至りて作る歌」(巻三・三二二)ではこれを用いている。しかし、今の場合はそうではない。同じく場を讚えるといっても、ここではその場に旺盛に繁茂する植物を指摘することによってそれがなされており、叙述はむしろ景的である。この面でも、この歌の表現が叙景に集中されていることを知りうるであろう。

やすみしし わご大君の 常宮とこみやと 仕へまつれる 雑賀野さびかのゆ
そがひに見ゆる 沖つ島 清き渚なぎさに……(巻六・九一七)

これは「紀伊の国に幸す時」の作の前半であるが、ここで注目し

たいのは「雑賀野ゆ、そがひに見ゆる」の句についてである。ここには「見ゆる」の語があつて、このこと自身が「見れば型」との関係を予想させるが、作者が「沖つ島 清き渚」の景觀を見たのは、「雑賀野」においてであつたと考えられる。「沖つ島 清き渚」は、「常宮」にいます天皇にとっては正面の景であり、作者はその天皇に向かい、詔にに応じてこの歌を奉ったから、「そがひに見ゆる」ということになつたのであろう。しかし、そのような作歌時の事情があつたとしても、ここでいっそう重要なことは、「見れば」が「見ゆる」に変わるることによって、「雑賀野」がたんに景を見る場ではなく、「沖つ島」と向かい合っている場所として、立体的な景の一端に組み込まれる結果となつているということである。すなわち、ここでは、基本に「見れば型」における(2)の部分、つまり「ある場に立つて国見をする」という作者の行為の叙述」と呼んだ部分を踏まえつつ、それがやはり景の叙述に変形されているということになる。赤人の作中には、なおもう一首、同じ句を持つ歌として、

繩の浦ゆそがひに見ゆる沖つ島漕ぎ廻る舟は釣りしすらしも

(卷三・三五七)

という羈旅の短歌があるが、この歌についても同様のことが言えるであらう。

若の浦に潮満ちくれば鴻を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る(卷六

・九一九)

ぬば玉の夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く

(卷六・九二五)

前者は右に述べた「紀伊の国に幸す時」の、また、後者は「吉野の離宮に幸す時」の作における反歌である。この二首には「潮満ちくれば」、「夜の更けゆけば」という条件句があり、下句に中心の景が叙せられていて、吉井巖氏もかつて述べられたように、これらはやはり「見れば型」の系列に属する歌と見るべきであらう。しかし、ここにはすでに「見る」の語はなく、また、先に述べた「みもろの 神なび山」(卷三・三二四)や「雑賀野」(卷六・九一七)のような、事実として作者の景を見た場を示す言葉もない。そして、「……見れば」に相当する条件句に述べられているのは、下句に述べられる中心の景の成立するための、いわば空間的、または時間的な条件で、広く言えば、これらはすでに景の一部であると言ってもいいものである。

以上、数例を通して述べたように、赤人の作品においては、叙述の焦点を景のみに絞ろうとする傾向がある。

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける(卷三・三一八)

これは「不盡の山を望る歌」の反歌で、「見れば型」の歌そのも

のであるが、この場合にさえ、初二句は、雪で真白に輝く富士の高嶺の景が、「うち出でて見」た瞬間に見出された景であることをあらわしており、そのことによって、景の印象を極度に強める役割を果たしていることは、かつて別稿で述べたごとくである。

わたくしはこの節のはじめに、赤人の作中には、基本に「見れば型」を踏まえつつ、これを或る方向に向かって変形したと思われる叙述を持つものがあると述べたが、その「或る方向」とは、すなわち叙景の方向だったのである。とすれば、赤人にとっては、「見れば型」よりも、「は」で直接にその場を指示してただちに叙景に入りうる「は型」の方が、いっそう似つかわしい型であったと言っているであろう。

四

わたくしは第二節において、「見れば型」と「は型」とは、すでにいずれも歌謡の中に見出されるが、赤人以前における萬葉集の長歌では、おおむね「見れば型」が用いられていたことを指摘し、第三節では、赤人の作中に、「見れば型」を踏まえつつ、これを叙景中心の方向へ変形して行った例のあることを述べ、叙景に焦点を絞ろうとする赤人にとっては、「は型」の方が似つかわしいのではないかということも付言した。この論述を通してわたくしが主張した

かったのは、端的に言って、赤人が伝統的な「見れば型」から出発し、これにさまざまな変形を加えつつ、ついに「は型」に到達したということである。

たしかに、これはかなり可能性の強い図式であると言っているであろう。しかし、前二節の論述は、必ずしもこの図式の正しさを十全に論証し得ているものとは考えられない。それは、赤人が、萬葉の歌人としては独自の「は型」から出発し、ついに伝統的な「見れば型」に帰着したという、まったく逆の図式を否定するに足る充分な根拠が、そこにはまだ示されていないからである。「見れば型」を踏まえつつ、これを叙景中心の方向へ変形して行ったものとして前節で挙げた諸例さえ、「は型」から「見れば型」へ回帰する途上での作であったと見ることも、まったく可能性のない考え方だとは断言できない。

萬葉集の中には、赤人の作品が、間に他人の作を挟みつつも、比較的まとまって載せられている部分があるが、巻三、および巻六の各雑歌の部にある。萬葉集に載せられた赤人の作品の多くは、原赤人集とも呼ぶべき赤人の作品集から採られたものではないかと思うが、わたくしは右の二つの部分を中心に、ある程度その原赤人集を復元することができないのではないかと、そして、その原赤人集は、作歌年月を注記しないままに、年代順に配列されていたのではないかと考え

る。

論述の繁雑化を避けるために、わたくしの考える原赤人集の構造をまず表示しておこう。もっとも、これは右の二つの部分を中心にわずかに考え得たもので、なお他にも、入るべくしてその位置を定め得ず、ここに加え得なかった作品があるろうことを断っておかねばならない。また、表の終に載せた11、12は、10以前と時代がやや離れており、原赤人集は、或いは10あたりで終わっていたのかも知れないが、萬葉集に作歌年月が明記されているので、便宜ここに加えたものである。

順序	萬葉の歌番号	略題	作歌年月
1	卷三・三二七―八	富士山	
2	卷三・四三一―三	真間娘子	
3	卷六・九四二―五	辛荷島	④
4	卷三・三二二―三	伊予温泉	
5	卷三・三二四―五	神岳	養老七(七二三)年五月⑤
6	卷六・九二三―七	吉野	神亀元(七二四)年三月⑥
7	卷六・九一七―九	紀伊	神亀元(七二四)年十月
8	卷六・九三三―四	難波	神亀二(七二五)年十月

9	卷六・九四六―七	敏馬浦	神亀三(七二六)年十月⑦
10	卷六・九三八―四一	印南野	神亀三(七二六)年十月
11	卷六・一〇〇一	難波	天平六(七三四)年三月
12	卷六・一〇〇五―六	吉野	天平八(七三六)年六月

右表における作歌年月欄の内、注④から⑦までの番号を付した3、5、6、9は、それぞれその注に記した別稿においてわたくしが推定したものであり、その他は、萬葉集に年月の注記があり、巻六の編者がなんらかの根拠に従って、推定、または確定したものである。東国、および伊予関係の作を、作歌年月の欄を空白にしたままで1〜4に置いたこと、さらに具体的に、東国関係を1、2に、伊予関係を3、4に置いたことについては説明を要するが、それは後述することとし、ここではまず全般的に、この順序、つまりわたくしの言う、年代順に並べられた原赤人集の配列順序が、萬葉の配列順序と異なっている部分について、わたくしの考える、萬葉で歌順の変えられた理由を説明しておこう。

萬葉集において、2が1と同じく東国の作でありながら連続して載せられなかったのは、2を挽歌と見て同じ巻三のその部へ移したからである。また、3が伊予下向時の作と推定されるものでありながら、4の前に置かれなかったのは、これを行幸従駕の作と見て、

従駕の作を集めた巻六の方へ移したからである。

巻六の部分にも、両者の間に配列順序の出入りが見られるが、これは6（九二三―七）と9（九四六―七）の歌に付された左注を見ることによって氷解する。すなわち、九二七の左注には「右は先後を審らかにせず。ただし、類をもちての故にこの次に載す」、九四七の左注にも「右は作歌の年月いまだ詳らかにあらず。ただし、類をもちての故にこの次に載す」とあって、いずれも巻六の編者が作歌年月を定め得なかったものであり、そのために、これらを同類の歌の最後に置くという方法をとることによって生じた順序の乱れだったと考えられる。

すなわち、まず6の吉野讚歌（九二三―七）は、養老七（七二三）年五月の金村作（九〇七―一二）と千年作（九二一―六）、および神亀二（七二五）年五月の金村作（九二〇―一二）といった、年月の明らかな吉野讚歌をそれぞれの年月のところへ置いた上で、その後、つまり神亀二年の金村作のあとに置かれたものである。もっとも、巻六には、赤人の吉野讚歌がもう一組入っている。それは12で、天平八（七三六）年六月の作と明記され、一群を離れて一〇〇五―六に置かれているが、この歌の作歌年月を確定することは歌の内容からは困難で、これは編者が何らかの資料によって、年月を知り得たものと考えられる。その資料は、作歌年月を記さないたてま

えの原赤人集ではなかったと見る可能性の方が強いかと思うが、かりに原赤人集であったとした場合、6は当然12より前に置かれていた筈で、従って、6は、巻六編纂の態度から見て、12以前の吉野讚歌で年代の明らかな最後の作、すなわち神亀二年の金村作のあとに置かれて当然であるということが考えられる。また、別資料に拠つたものである場合、原赤人集にも年月を記さないままに歌は載せられていたという場合と、歌も載せられていなかったという場合とが考えられるが、前者なら、別資料によって年月を知った上で、右と同じ処置をとったということが考えられ、後者なら、今の場合論外としてよからう。（ただし、原赤人集が10あたりで終わっていたかも知れないという先の推定にとって、この歌が別資料にのみあった可能性をも持つということは、微弱にしろ一つの傍証を加えることになるという点を、ここに指摘しておきたい）。

9の敏馬の浦の作（九四六―七）については、九三五―七に、「（神亀）三年丙寅秋九年十五日（統紀では十月のこととする）に、播磨の国の印南野に幸す時に云々」という題詞を持った金村の作があるが、そのあとに、年月を記さない赤人の10（九三八―四一）、3（九四二―五）、および今の9（九四六―七）が並んでおり、従って、先に引用した九四七の左注における「右」が、どこまでを指すかという点があいまいである。すなわち、10、3、9を指すとも、

3、9を指すとも、9のみを指すとも考えられるのである。しかし、10は、歌詞から見て、おそらく編者も金村作と同じ行幸時の作と認めただであろう。3についても、そう考える説のあることを第一節で述べたが、もし編者もそう考えたのなら、わたくしはこれを10の前に置いたと考える。それは、3に見える地名から、これが西行時の作であることがわかるのに対して、10の反歌第三首（九四一）には、

明石瀉潮干の道を明日よりは下笑ましけむ家近づけば

とあって、これは明らかに帰路、畿内に入る前日の作だからである。わたくしは九四七の左注における「右」の範囲を3、9と考えるが、先に述べたように、3が従駕の作と見て卷六へ移されたものとすれば、3、9はともに印南野と同じ山陽道東部方面行幸時の作と見做されたことになり、こういう「類をもちて」、「作歌の年月いまだ詳らかにあらざるままに、ここに置かれたものということになる。そして、3が9の前に置かれたのは、私見によれば、この方が作歌年次が古く、原赤人集で9よりも前に配列されていたからに他ならない。

東国、および伊予関係の作を1〜4に置いたのは、卷三歌群の最後に位置する5を、わたくしが養老七（七二三）年五月の作と認め^⑤たからである。そして、東国関係を先に、伊予関係を後に置いたの

は、卷三歌群における歌の配列順序がそうなっているからである。もっとも、卷六で見たように、卷三においても、編者が或る意図のもとに、原赤人集の年代順配列を改めることがあったかも知れないということは、充分に考慮しておく必要がある。事実、卷三の編者は、2を、歌類をもって挽歌の部に移し、虫麻呂集所出の富士山の歌（三一九―二一）を、これまた「類をもちて」（三二一左注）赤人の1の次に割り込ませてもいるのである。

しかし、わたくしは今のところ、この赤人の作品群、すなわち三一七―一八、および三二二―二五に、卷三編者の順序改変の意図を見出すことができない。駿河（富士山）、伊予（伊予温泉）、大和（神岳）という作歌地の順序についてもいちおう考慮はしてみたが、当時の国名配列の一般的基準から言えば、むしろ大和、駿河、伊予の順である筈で、この順序に一致しないということは、むしろ逆にこれが作歌年代順であることを物語っているもののようにも思われる。赤人はまず東国へ、次いで伊予へ下ったのであり、その時期はいずれも、5の神岳の作の作られた、養老七（七二三）年五月以前だったと考へたいのである。

さて、以上に述べたわたくしの仮称「原赤人集」の構造論がかりに認められるとした場合、赤人における「見れば型」、「は型」、およびその中間型の分布はどのようなようになるであろうか。もっとも、

「は型」の三七八、中間型の三五七はなお作歌年代を確実に定め得ず、先の表にも入っていないもので、省略する他はないが、これを除く他の例については、次表のような結果が得られる。第三節で述べたように、三三四の神岳の歌は結局「は型」ではあるが、中間型の要素をも持っているので、両方に出しておいた。なお、歌番号に括弧を付したのは短歌、他はすべて長歌である。

順序	略題	見れば型の歌	中間型の歌	は型の歌
1	富士山	(三七七・ 三二八)		
2	真間娘子			
3	辛荷島	九四二		
4	伊予温泉	三三二		
5	神岳		三三四	三三四
6	吉野		(九二五)	九二三
7	紀伊		(九二七・ 九一九)	
8	難波			
9	敏馬浦			
10	印南野			

赤人における叙景形式の変遷

11	難波	
12	吉野	一〇〇五

これによって、赤人はやはり伝統的な「見れば型」から出発し、これを叙景の方向へ変形しつつ、その過程で「は型」を得たものと考えていいとわたくしは思う。

赤人と同じ時代の歌人たちの宮廷儀礼歌について、「見れば型」と「は型」の分布状態を概観すると、千年の九一三、金村の九二〇がなお「見れば型」であり、金村の九〇七、旅人の三一五が「は型」である。この「は型」の内、作歌年月の古いのは金村の吉野讚歌九〇七の方で、それは養老七(七二三)年五月である。これは赤人の、中間型を含みつつも「は型」を打ち出した第一作、すなわち5の神岳の作(三三四)と同年月であるが、この両者の関係については、すでに別稿^⑤で述べたごとく赤人の方が先で、同じ吉野行幸の際、先日途中神岳で歌われた赤人の作を、金村が吉野で踏まえて歌ったものとわたくしは解釈している。金村は二年後の、神亀二(七二五)年五月の吉野讚歌(九二〇)では、なお「見れば型」を用いているのである。

舒明天皇以来の、萬葉儀礼歌における「見れば型」の伝統を打ち破って、「は型」を打ち出したのは赤人であった。もっとも、第二

節で述べたように、「は型」はすでに歌謡の世界に存在したものであり、その意味では、これは赤人による「は型」の復活と言うべきであろう。かつて述べたように、赤人の作中には、人麻呂以前の、初期萬葉や歌謡の表現を発掘して用いた例がかなり多いが、これもまたその一例であったと考えられる。しかし、他の諸例についてかつて述べたのと同じく、赤人にとって歌謡の「は型」が、たんなる復古趣味などによって復活させられたものではなく、彼の目指した客観的な叙景表現のために、より有効な型として、主体的に選び採られたものであったことは確かであろう。ここに、赤人の創造性を認めないわけにはゆかない。

次代の宮廷歌人、田辺福麻呂の作中には、「は型」が六例^⑩、「見れば型」が三例見出されるが、いわゆる宮廷儀礼歌としての長歌はすべて「は型」である。赤人の打ち出した「は型」は、次代の宮廷儀礼歌としての長歌における叙景形式として、不動の地位を確保することになるのである。

注

- ① 拙稿「敏馬の浦に過る時の歌―赤人作歌の作歌事情―」（『女子大國文』第七十九号）参照。
- ② 吉井巖氏「見る歌の発想形式について―『見ゆ』を中心に―」（『萬葉』第四十五号）参照。

③ 拙稿「山部赤人論」（『萬葉論序説』青木書店）参照。

④ 注①に同じ。

⑤ 拙稿「養老の吉野讚歌」（『境田教授喜寿記念論文集 上代の文学と言語』その刊行会）参照。

⑥ 拙稿「赤人の吉野讚歌―作歌年月不審の作群について―」（『萬葉』第九十一号）参照。

⑦ 注①に同じ。

⑧ 注⑤に同じ。

⑨ 注⑤に同じ。

⑩ 拙稿「赤人の作歌精神―前人麻呂時代的表現をめぐって―」（『女子大國文』第六十七号）参照。

⑪ 卷六・一〇四七、一〇五〇、一〇五三、一〇五九、一〇六一、一〇六五の六例。なお、これは福麻呂の宮廷儀礼歌としての長歌のすべてである。

⑫ 卷九・一八〇一（長歌）、卷六・一〇五五、卷九・一八〇六（以上短歌）。

上代における道祖神の呼称について

井 手 至

道の曲り角や片隅に、石造りの、或いは木でできた道祖神が祀ら

れている風景は、歳時習俗や路傍の遺物に興味を抱く者にとって、

わが国ではごくありふれた、珍しくないことである。しかし、その

神格が、中国伝来の「道祖神」という名で呼ばれたりするところか

ら、それが、なにか中国から伝わった神格のように思われたりもす

るが、道祖神的な神格は、実はわが国において土地や聚落や住居の

最も古い守護神の一であったと考えられる。このことについてはま

た別に考察を加えたいが、記紀の創世神話の神々の中にもすでに道

祖神的な神格が現われており、猿田彦神もまた、そうした神格の一

であった。

前者については、創世神話の「角杵神・活杵神」や「意富斗能地

神・大斗乃弁神」などの対偶神は明らかに後世の道祖神と同系の神

格であって、土地・聚落・住居の守護神であったと認定されるが、^①

上代における道祖神の呼称について

後者についても、天孫降臨の際、天の八衢に立って天孫の一行を睨みつけた神として知られる。この地上界に降り立つ天孫はとりもなおさず、外来の異族と目されるからである。^②

道祖神は、このように、その土地・聚落・住居——したがってそこに住む住民を守護する神格であって、境界をなす地点など、邪悪な者の侵入してくる所に立って、その侵入を防塞する役目を果たす神と考えられた。

ところで、今日、われわれは、「祖さえの神・賽さい(幸さい)の神・道祖さいと土神」などという呼称よびなで道祖神を呼んでいる。このうち、「さえの神」という呼称については、その古形が「佐部乃加美」(倭名鈔十卷本)であることから考えて「障さへの神」の意とみてよいであろう。これに対して、「さいの神」の場合はどうかというに、私は、これは動詞「障さふ」の古活用形「障さひ」に由来するものと考えたい。

すなわち、上代語の動詞「障さふ」は、

佐弁なへぬ御言にしあれば愛かなし妹が手枕離れあやに悲しも(卷

二十・四四三二)

のように、通常、下二段に活用する動詞であったから、その連用形「障へ」を用いて「障への神」という呼称が一般に行なわれたわけであるが、これよりさき動詞「障ふ」には四段に活用するものがあるが、上代にもその痕跡を留めるのである。乏しいながら、その四段活用の動詞「障ふ」の用例を求めると、次のようなものを挙げることができよう。

①佐比売山……石見与出雲二国堺。(出雲風土記、飯石郡)

②……腫波の立塞道を誰が心いたはしとかも直渡りけむ

(卷十三・三三三五)

③朝戸を早くな開けそ味沢相目がほる君が今宵来ませる(卷十一

・二五五五)

④夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするか佐日の隈みを

(卷二・一七五)

①の「佐比売山」の語義は「障ひ、目山」と考えられ、出雲風土記には、「以此而、堅立加志者、石見国与出雲国之界有名佐比売山是也」(意宇郡)ともあり、立てられた「加志」は呪術的な占有標であると同時に、境界を防塞する守護神の依り代とも見られるもの^③、②の「立塞道」は古写の天治本・類聚古集の本文で、これによる限り「立ち障ふ道を」と訓読せざるをえないもの、③の「味沢

相」は「味障はふ」の意で「目」にかかる枕詞、つまり味鴨をいつも遮っているの意で網目の意の目に続けたもの^④、④の「佐日の隈み」は、真鍋次郎氏のように、直ちに「障ひの隈み」と解しないにしても、地名につくことの稀れな(卷十・二二〇六「沙額田」あり)接頭語「さ」を葬地松隈につけていうことに「障ひの隈」の意がこめられていたのではないかと考えられる。「松隈川」に冠せられた「佐松乃熊」(卷七・一一〇九)、「左松隈」(卷十二・三〇九七)についても同様に考えられよう。かくて、これらの例は、いずれも、かつて四段活用の動詞「障ふ」の存在したことを推測させるが、「障ひの神」の「障ひ」は、その四段活用の「障ふ」の連用名詞形であったということになるのである。

因みに、下二段に活用する動詞が、古く四段にも活用したと考えられるものに、右の「障ふ」のほか、「隠る・垂る・触る・忘る」などがあり、上代の文献資料に通常は下二段活用で現われるこれらの動詞には、

……青山に 目が加久良ば ぬばたまの 夜は出でなむ……

(記、上・三)

……栲綱の 白髪の上ゆ 涙多利 嘆きのたばく……(卷二十

・四四〇八)

大君の御言畏み磯に布理海原渡る父母を置きて(卷二十・四三

二八)

山越えて海渡るともおもしろき今城の中は倭須羅ゆましじ(斉明紀四年、一一九)

などのように、四段に活用した痕跡を認めることができる。

ここに、古く、道祖神は、下二段活用動詞「障ふ」に由来する「障への神」のほか、四段活用の古動詞「障ふ」に由来する「障ひの神」という呼称を有していたと推測せられる。その「障ひの神」が、後世、「賽(幸)の神」と記されるのは、「障ひ」がハ行転呼音で「障い」と呼ばれるようになり、神の祝福に報賽する意味で「賽の神」と記し、また、「幸」の音便「さい」と通用させて、祝福(幸)をもたらず神の意で「幸の神」と記されるようになったものと思われる。

二

さて、道祖神は、また、上代には「道の神」「手向の神」とも呼ばれた。

……砺波山 手向の神に 幣奉り 我が祈ひ禱まく……(巻十七・四〇〇八)

玉梓の道の神たち幣はせむ我が思ふ君なつかしみせよ(巻十七

・四〇〇九)

上代における道祖神の呼称について

は、その用例である。「道の神」が、道辻に立つ神の意であり、「手向の神」が、道行く人の手向する神の意であることはいうまでもない。

また、道祖神は、古く、「ふなとの神」「くなの神」と称せられることがあった。「くなの神」の呼称に関して思い合わされるのは、今日も道祖神のことを「さいと神」と呼ぶことであり、また、記紀の創世神話に「おほと男・おほと女」という対偶神が現われていることである。これらの神名には、いずれも「と」がつくが、おそらく、その「と」は「門」(狭い通路の意)を意味する語であろうと思われる。つまり、「おほと」が「大門」であるように、「さいと」は「障ひ門」の意であったと考えられる。そこで「ふなと・くなの神」の場合も、少くとも、その「と」は「門」の意を考えてよいかと思われるのであるが、一体、「ふなと・くなの」という語は、いかなる意味を有する語であったのであろうか。

「ふなとの神」「くなの神」という呼称の語源については、前者が「経勿門の神」の意(武田祐吉説)とか、または「くなの神」の音訛などと説かれ、一方、後者は、「来勿門の神」の意(大槻文彦説)だと説かれてい、最近の古語辞典などでもこの通説が踏襲されている。すなわち、「くなの神」は、

大八衢尔湯津磐村之如久塞坐、皇神等之前尔申久、八衢比古・八

衝比売・久那斗止御名者申与、……（祝詞・道饗祭）

に現われるが、この神格を、「四方四角より疎^{うと}び荒び来^くる

道祖 佐部乃加美岐神、日本私記云岐神布奈止久加美（巻一）

と見える「ふなとの神」と、後述のように同一視され、どちらも道祖神の一と考えられた。つまり、「ふなとの神」も「くなの神」も、邪悪な者の内部への侵入を防塞して守護する神格であったと見られるから、これを「経勿門の神」「来勿門の神」と理會するのは、はなはだ巧みな語源解と言わねばならない。しかし、それを、語構成の上からみると「経な」「来な」という禁止表現に名詞「門」を直接させた語構成となる点は、造語法としてあまりに巧みすぎるくらいにあるのではなからうか。ひるがえってそのことは、必然的に、遡ってその語源解を果してその通り信用してよいものかどうか疑われ、或いは巧みなこじつけに基づく例の民間語源解に惑わされていのではないかと思われるのである。

三

そこで、次に、「ふなとの神」について記した最古の文献である

古事記の例についてみると、

（伊邪那岐命）到^ニ坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原^ニ而、禊祓也。故、於^ニ投棄御杖^ニ所成神名、衝立船戸神。（記・上）

とあり、そこに、「衝立船戸神」とある点が注意される。この神名は、武田祐吉が説くように、その形姿から名づけられたもののように思われる^⑤。つまり、その神名は、船戸に突き立てられた杖から来たものと言えるのではなからうか。とすれば、次に「船戸」とは何かということになるが、私は、「船戸」は「船門」（「ふなと」の「と」は甲類の「と」）の意であり、それは船着き場、船津を意味する語であったのではないかと考える。

船着き場が「船門」または「船津」と称せられたことは、地名に多くの傍証を見いだすことができる。たとえば、和歌山県那賀郡岩出町大字船戸の地は、紀ノ川の船津に当り、また、吉田東伍の『大日本地名辞書』によれば、常陸風土記に「造^レ舟而奉^レ納^ニ津宮^ニ」（香島郡）とある茨城県鹿島郡大船津は、舟戸ともいい、北浦に臨む鹿島の水駅であったし、福島県河沼郡の船渡もまた、只見川の渡津に当るところであったという。千葉県東葛飾郡意部郷で、利根運河が下利根川に通じるところが船戸と呼ばれていたのもその類である。思うに、船着き場を「津」ということ自体、そこを陸地の「門」をなす所とみての命名であったと考えられる。しばしば「水門」

(河口)が「津」(港)として利用されたことも、そのような発想を容易にしたであろう。上代語においては、「かそけし——かすか(幽)、たかまと——たかまつ(地名)、かもどく——かもづく(鴨着)、つの——つぬ(角)、あよく——あゆく(揺)、あよひ——あゆひ(足結)、よ——ゆ(助詞)はろはろ——はるか(遙)」など、オ列甲類音とウ列音が交替して類同する意味を表わすことが多いが、「船門——船津」もその類例の一と見ることができよう。

車馬の自由にならない時代においては、現代人の想像する以上に、人々は交通、運搬を舟に頼っていたようであり、それ故に、舟着き場は、交通の要衝として、まさに境界防塞の神が祀られてしかるべき場所であったのである。かくて、船門(船津)に祀られた神の意で「船門の神」が道祖神の呼称の一となっていたと考えられる。

四

ところで、古事記の伊邪那岐命の黄泉訪問神話の中の、前節に引用した箇所該当するところを、日本書紀(神代紀上、一書)には乃投^ニ其杖^ニ曰^ク「自^レ此^ニ以^テ還^ル香^ニ不^レ敢^ル来^ル。」是謂^フ岐^ノ神^ニ。此本号曰^ク来^ル名^ノ戸^ノ之^ノ祖^ノ神^ニ焉[。]

と記している。右の「岐神」については、別の箇所に「岐神、此

上代における道祖神の呼称について

云^フ布^ノ那^ノ斗^ノ能^ノ加^ノ微^ニ(神代紀上)と訓注があるので、「ふなどの神」と呼ばれていたことがわかる。つまり、船門にあらざる所にいます道祖神も、同じ境界防塞守護の勢能をもつ神格として「ふなどの神」と呼ばれていたわけで、その神はまた「くなどのさへの神」とも呼ばれていたというのである。

そこで、次に「くなどの神」の名義についてであるが、私は、「ふなどの神」の場合と同様に「くなど」にいます神、「くなど」に祀られた神の意ではないかと考える。つまり「くなど」とは、「船門」と同様に、その神の祀られた場所を意味することばであったのではなからうか。そうすると、「くなど」の「と」(甲類)は前述のようにやはり「門」(狭い通路の意)と考えられるから、「くな」が何であるかが解ればよいことになる。そこで、上代語や平安時代語から抽出されるもろもろの語根(語基)と照合してみると、「千曲川」などの「くま」(曲・隈の意)や「隈刀」(卷二十・四三五七)はやや遠いけれども(ナ行子音とマ行子音の交替例は他に存在するので無関係とは思われないが)、擬態語からなる形容詞「くねくねし」(源氏物語、紅葉賀)の「くね」や「くねる」(古今集、仮名序)の「くね」(いずれも「曲」の意)は同根と考えられ、また、

恨^ハ加^ハ久^ハ奈^ハ(新撰字鏡)

癡^カタ^クナ^ノ物^ノコ^ノ无^長ヲ^サナ^キ物^ノ……(東大寺諷誦文稿)

久奈多夫礼良尔あざむかえたる所註誤百姓波、（続紀宣命、一九詔）

などの用例に見える「かたくな」「くなたぶれ」の「くな」とは、形式上も同一で、同根のことばと見てよいかと思われる。つまり、「くな」とは真直ぐでない曲りくねった状態を意味する形状言であったと推定されよう。

大護三郎氏の踏査^⑤によれば、山梨県西八代郡下部町しもべの辺りには、かつて道祖神信仰が盛んであったらしく道祖神に因む石仏が多い由である。今、ここを国鉄身延線が走るが、下部駅の北に久那土くなたと駅がある。下部町三沢の地である。もちろん、その地名は道祖神にゆかりの名であると考えられるが、それは、元来は、曲門くなと（曲りくねった狭い通路）の意ではなかっただろうか。南から富士川左岸を遡上してきた道は、下部の北および久那土の北を遮る山塊に阻まれて曲折するが、富士川の流れも久那土の北に走り出た山に遮られて大きく曲る。現在の川筋からいって、昔はもっと大きく東西に弯曲していたのが短絡したものと想像される。地形的にも曲門くなととして道祖神が祀られるのにふさわしい土地であったといえようか。

かくて、日本書紀の「くなのさへの神」とは、「曲門の障への神」の意で、「くなと」に祀られる防塞神をさす呼称であったといふことができる。この神名の「くなと」が、前節に引用した祝詞（道饗祭）においても日本書紀（神代紀上、一書）においても萬葉仮名で

書かれていたことは、すでに当時、意味が不分明になっていたか、それとも、そのことばにまさに該当する漢字が見つからなかったかのどちらかであったであろう。しかし、今や、語源解明のための手続きを踏んで、右のような結論に到達したからには、「くなと」の「くな」は「くねる」の「くね」や「くなたぶれ」の「くな」と同根の語であって、それは曲門の意で、道の隈（道路の曲り角）のようなどころをさした語であったと推定して誤りないであろう。

五

上代に異郷、他国へ旅する者は、他界において、通行の許諾を得、身の安全を守るために種々の呪術的な行為を行なったが、境界を守る道祖神的な神（障への神、道の神、手向の神、船門の神、曲門の神など）に対して手向（手祭）をするのもその一の呪術的祭祀儀礼であった。萬葉集に、そのような道祖神に対して手向をしたことを歌った歌は数多いが、集中の旅の歌には

周防なる磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒しその道（巻四・五六七）

玉梓の道の神たち幣まひはせむ我が思ふ君をなつかしみせよ（巻十・七・四〇〇九）

のような手向の歌のほか、

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際まに い隠る
まで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを

しばしばも 見放けむ山を……(巻一・一七)

……隠りくの 泊瀬の川に 船浮けて 我が行く川の 川隈の

八十隈おちず よろづたび 顧みしつつ 玉梓の 道行き暮

らし……(巻一・七九)

……玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば 此の

道の 八十隈ごとに よろづたび 顧みすれど いや遠に 里

は離さかりぬ……(巻二・一三一)

……漕ぎたむる 浦のことごと 行き隠る 嶋の崎々 隈もお

ちず 思ひぞ我が来る 旅の日長み(巻六・九四二)

……ささなみの 志賀の唐崎 幸くあらば また帰り見む 道

の隈 八十隈ごとに 嘆きつつ 我が過ぎ行けば……(巻十三

・三二四〇)

……玉梓の 道に出で立ち 岡の崎 いたむるごとに よろづ

たび 顧みしつつ はろはろに 別れし来れば……(巻二十・

四四〇八)

など、道の隈(曲り角)や川隈、岡の崎をめぐる時などに特別の関

心が払われていたことを示す歌のあることが注意される。思うに、

このような旅の歌乃至旅を詠んだ歌が多いことは、

上代における道祖神の呼称について

道の隈八十隈坂に手向せば過ぎにし人にけだし逢はむかも(巻
三・四二七)

の歌から推定されるように、道の隈つまり曲門くまどには手向の場所があ
って、手向の神が祀られていたことと、きつと関係があるろう。旅人
は、そこで道祖神に手向しがてら、立ち止って一息入れ、家郷を振
り返ったのである。また、

……玉梓の 道の隈みに 草手折り 柴取り敷きて……(巻五

・八八六)

の歌において、枕詞「玉梓の」が「道の隈み」(曲り角の辺り)に
かかることばとして用いられたのも、やはり、そのような曲門くまどに、
道祖神が祀られていて、その依り代の梓が立てられていたことを証
するものと見なければならぬであろう。つまり、これらの萬葉歌
は、いずれも、曲門くまどに道祖神が祭祀されていたことを前提にして、
はじめて、文意がよく理會できるように思われる。「くまなどの神」
を「曲門の神」の意に解することに附随して一言付け加えた次第で
ある。

注

① 拙稿「『古事記』冒頭対偶神の性格」『論集日本文学・日本

語』上代篇所収、昭和五二年。

② 拙稿「記紀の神話における猿田彦神」『人文研究』一九卷九

分冊、昭和四十三年三月。

③ 拙稿「枕詞ハシタテノの性格」『国語国文』二九卷九号、昭和三十五年九月。

④ 拙稿「枕詞『あぢさはふ』の背後」『国語国文』二六卷七号、昭和三十三年七月。

⑤ 真鍋次郎「『佐松の隈み』考」『萬葉』三三二号、昭和三十四年七月。

⑥ 大野晋「記紀の創世神話の構成」『文学』三三三卷八号、昭和四十年八月。

⑦ 大野晋ほか『岩波古語辞典』昭和五十年。

⑧ 武田祐吉『古事記説話群の研究』昭和二十九年、三五七頁。

⑨ 大護三郎『私の石仏手帳』第五冊、昭和四十九年、五一頁—五七頁。

⑩ 拙稿、注③に同じ。

朝日賞に輝く不滅の文化遺産 全巻完結！

萬葉集注釋

全20巻
別巻2巻

最終回
発売中

別巻

索引篇

澤瀉久孝著

価4800円

巻第一	4800円	巻第十二	4000円
巻第二	4800円	巻第十三	3800円
巻第三	5500円	巻第十四	3800円
巻第四	5500円	巻第十五	3300円
巻第五	4000円	巻第十六	3800円
巻第六	3800円	巻第十七	3800円
巻第七	4800円	巻第十八	3300円
巻第八	4000円	巻第十九	3800円
巻第九	3800円	巻第二十	3800円
巻第十	4800円	本文篇	5500円
巻第十一	4800円		

中央公論社

東京京橋2-1 振替東京2-34

菊判二色刷貼函入／表紙最上麻布／天金豪華
特製本／口絵原色コロタイプ版／本文9ポ原
文10ポ4分アケ写真版地図多数／附録8頁

ヌバタマの語源

田中みどり

ヌバタマは、上代文献に

古事記 (日本古典文学大系)	日本書紀 (日本古典文学大系)	萬葉集 (塙書房)
奴婆多麻	農播柁磨	奴波多麻 奴婆多末 奴婆多末 奴婆多末 野干玉 野干玉 野干玉 夜干玉 烏珠玉 烏珠玉 黒玉
2例	1	2 23 13 1 10 1 2 1 16 2
2例	1	80例
83例	計	

合計八十三例が右のやうに表記され、枕詞ヌバタマノは「黒」「夜」などにかかる。現在なほこの語源を「夢」「寝」に求める説もあるが、これが「黒色のもの」であることは次のことより明らかであらう。即ち

ヌバタマノが「夜」にかかるものに

安可禰佐須昼は物思ひ奴婆多麻乃夜はすがらに音のみし泣か

ゆ (萬葉15・三七三二)

烏玉この夜な明けそ朱引朝行く君を待たば苦しも

(萬葉11・二三八九)

の如く、

あかねさす(昼)―ぬばたまの(夜)

あからひく(朝)―ぬばたまの(夜)

と対置されたものが八例存在する。

あかねさす(昼)―ぬばたまの(夜)

萬葉13・三三七〇、三三九七、15・三七三三、

19・四一六六、20・四四五五

あかねさす(日)―ぬばたまの(夜)

萬葉2・一六九

あからひく(朝)―ぬばたまの(夜)

萬葉11・二三八九

あからひく(日)―ぬばたまの(夜)

萬葉4・六一九

アカネサス・アカラヒクは〈赤〉―〈明〉を表はさう。それならば、それに対応するヌバタマノもまた、視覚的なイメージの上に立ったもの、と考へてよからう。即ち、〈赤〉―〈明〉に対応する〈黒〉―〈暗〉こそが、この「夜」にかかるヌバタマノもつ意味である。考へられ、これはこの詞が色彩そのものを表はす「黒」にかかることに照応しもする。即ち、「黒」「夜」の共通項は〈黒〉であり、それにかかる枕詞ヌバタマノのヌバタマは〈黒色のもの〉、ノは「の」様な、「様に」の意の助詞である、と考へられる。

さて、その表意文字より従来ヌバタマは〈烏扇(檜扇)の実〉ないし〈黒玉〉であると考へられてゐるのであるが、先に示した如く、萬葉集全八〇例中、

野干玉10例、野干子1例、夜干玉13例、烏玉23例、烏珠2例、

黒玉9例、

といふ数は、〈烏扇の実〉ないし〈黒玉〉を、語源はともあれ、當時ヌバタマと呼んでゐた、といふことを証するものではあらう。

〈烏扇の実〉をヌバタマと呼び、その色が黒いところから「黒

玉」といふ用字がなされたとする説が古来あり、それらの説は〈烏扇〉のことをヌバと呼んだのでなければ無力である、とする論も既に存在する。^⑧

そして、ヌバタマとは「黒玉」のことであり、それが黒色の〈烏扇の実〉にも転用されたものである、ヌバは「ヌマ(沼)」と結びつけ「泥」を言ふことができ、「泥」を言ふ語が次第に「黒」を言ふ語として、換言すれば黒の色名と化する――即ち、ヌバは「黒を意味する語」である、との説があり、^⑨

『萬葉集注釈』は、その説をとりあげ、

沼と黒との関係についてはなほ異論もあらうが

上代にクロタマの語が見あたらないところを見ると、黒玉の事をヌバタマと云つたと思はれ、それが「ぬば玉」の本義と思はれる。たゞ「白玉」が「真珠」と書かれてゐるものになるとその文字通り真珠をさす事になったやうに、特に「野干玉」「夜干玉」と書かれてゐるものが多いところを見ると当時既に烏扇の実をヌバタマと呼ぶに至つてゐた事は認められる。^⑩と述べる。

私もこれらの御説に大概同感である。〈黒玉〉はヌバタマと呼ばれてゐたであらう。そして〈烏扇(檜扇)の実〉は〈黒玉〉に似てゐたからヌバタマと呼ばれたのであつたらう。ただ、〈黒玉〉がヌ

バタマと呼ばれることになった経緯については、次の如く考へるのである。

二

我が国の装身具には、先土器時代から石・貝・骨製のものが存在する。そして、吉田格氏に拠れば、縄文時代早期後半の滋賀県石山貝塚より、熊の犬歯の垂玉が発見されてゐる。

縄文時代前期になると滑石・蛇紋岩・土製の玦状耳飾が出現し、中期に硬玉製のものが現れ、土製は滑車形となり、更に後期になるとさかんに流行し、滑車形のものゝ薄く大きくなり、彫刻文・透彫がおこなはれ、耳栓と呼ばれるものも現れる。また、朱漆滑車形の木製耳飾も出土してゐる。

更に縄文時代晩期には、硬玉製の勾玉・滑石製の管玉・青石・牙玉・碧玉などの珠玉類が発見されてをり、^⑤弥生時代には、玻璃製のものも加へて、種々の珠玉類が発見されてゐる。^⑥

そして、珠玉類が最もさかんになるのは次の古墳時代で、瑪瑙・碧玉・玉髓・水晶・石英・滑石・蠟石・蛇紋岩・琥珀・硬玉・土・埋木・玻璃・金銅・銀銅などによる、丸玉・平玉・小玉・管玉・白玉・棗玉・密柑玉・山梔玉・切子玉・勾玉など、さまざまの質・形のものに及ぶこととなる。^⑦

これらのうち黒色を呈するものは、蛇紋岩・土・木製のものであるが、木製のものは、既に縄文時代に朱塗のものもあること故、必ずしも黒色であったとは限らず、除外して考へてよからう。次に蛇紋岩製のものは、出土数もごく少数に限られ、一般的であったとは認め難いやうである。^⑧

そこで、人々の身近にあつて、容易に手に入れることができ、また容易に製造することのできた土製のものをこそ、この黒玉と考へたい。

何故ならば、萬葉歌の成立当時、既に「黒玉」ないし「烏扇（檜扇）の実」をさす言葉として定着してゐた、と言ふよりは寧ろ、既に「ヌバタマノ」といふ枕詞の中のみ、わづかに生きてゐたヌバタマ「黒玉」は、明らかに萬葉歌成立以前のものであり、従つて一部知識人の連想するイメージではなく、広く一般の人々の間にあつた言葉の中から起こつたものであつた、即ち、黒玉は広く人々に親しまれてゐた事物であつた、と考へるからである。

『類聚名義抄』に「土タマ」の訓が存在することも、あながちこの論を否定するものとはならぬであらう。否、寧ろ、黒色のタマとして土製のものが一般的であつたことを積極的に肯定するものであると思はれる。

参考の為、左に

A、『倭名類聚抄』（元和古活字本）玉類の倭訓
 B、『類聚名義抄』（観智院本）に於いて

イ、タマの名を表はすと考へられ、倭訓を有つもの・色彩名のあるもの

ロ、Aに照応するもの

C、『新撰字鏡』（天治本）に於ける、A・Bに照応するものの用字

（『新撰字鏡』には、タマの明確な倭訓を有つものはない。）
 を表にし、更にその色彩を記す。（但し、カタカナは現行のものに改めた。）

倭名類聚抄	類聚名義抄	新撰字鏡	色彩
珠 真珠之良太麻	珠 タマ シラタマ 真珠 シラタマ	珠 白玉也	白
玉 白玉和名上同	玉 タマ 白玉 シラタマ	玉	
璞 阿良太萬	璞 アラタマ	①	
水精 美豆止留太萬	水王 水トルタマ 月珠 水トルタマ		透明
火精 比止流太萬	火珠 ヒサクガタ 瑒瑒 瑞玉 ヒトルタマ	瑒瑒	透明

瑠璃 留利	瑠② ルリ	③・④ ⑤⑥ ⑦⑧	青
雲母 岐良々	雲母 キラ、 雲珠 ウズ キラ、	玫瑰	五色
玫瑰 今案和名与雲母同	玫瑰	⑦ 瑚 サムゴ	赤
⑦ 瑚	⑨ 珀 クハク	⑩	黄
琥珀 久波久	⑩	⑭ 玉赤色	赤
碓磬 謝古	碓磬 シヤコ	珂 馬⑯也	白
馬⑪ 女奈宇	碼⑫ メナウ 璫⑬ 赤色玉 ヌムオ	珂 馬⑯也	赤
鍮石 中尺	鍮石・鍮石 中尺		金屬色
碧 碧樹	碧 ミドリ アヲシ 碧樹 ノタマ	⑰ 玳翠也	緑
⑱ 土	ツチ ハカル イシ トコロ ヲリ ツチフル クリ タマ		黒
⑲ 赤玉	⑲ 赤玉 タマキ	⑲ 赤玉也	赤
⑳ 黒玉	⑳ 黒玉	⑳ 黒玉	黒

「土」は『類聚名義抄』に

⑱土 上通 下正 音吐^ド ツチ イシ トコロ フリ ハカ
ル クリ ワタル ツチフル タマ

と訓む。そこで、次に「土」の周辺をさぐってみたい。

『新撰字鏡』(天治本) ……右()内は享和本

塊 (堅立也)
口内反去堅土豆知久礼

漚 (黒泥久呂)
奴結反黒泥也又呼徳反黒豆知

⑳ ㉑ ㉒ (柔)
三同作如常如尚二反上漚也弟泥也
肥柔土也国也古豆知又古萬介志

塊 (四)
於六反入塊也西方土
(可) 居也古江豆知也

平却 地奈良須

⑳ (式延) (也)
戒延反擊 (㉑) 土也謂作泥物也
柔也和也取也長也 土乎 称也須

埴 市力反入黏土也波尔也

『倭名類聚抄』(元和古活字本) 塵土類

塵埃 孫愔云揚土也陳哀二音^{和名}知利

埴塼 兼名苑云塵埃也逢思二音

糞堆 弁色立成云^{阿久}上附問反^{太布}下都回反

ヌバタマの語源

土塊 弁色立成云塊土片也音会^{和名}知久礼

埴 积名云土黄而細密曰埴常臧反^{和名}波爾

堊 唐韻云白土也音惡^{和名}良豆知

⑳ 积名云土色黒曰^{和名}音^{和名}呂豆干

涅 唐韻云水中黒土也奴結反^{和名}利久

泥 孫愔云土和水也奴侶反^{和名}比知利古
一云古比干

『類聚名義抄』(觀智院本) クリ

⑱土 (先掲)

涅 奴結反 クリ クリハム ハ、カル ソム ヤム ハヤル クリツチ
クリニスレトモ 和子チ

⑳ 俗通 クリ クロシ

泥 奴侶反 水名 ワヌナク アツシ ツチクレ ミタル ナヅム ヌル
ヒヂ ト、コホル

『類聚名義抄』(觀智院本) ツチ

⑱土 (先掲)

埴 ハニ ニハ ホル ツチ ウツム 土クレ 音寔

壤 人兩反 チリ 土クレ サカヒ ツチ コマカニ サ、ク
国ノサカヒ ウクロモチ ハラ、ク 和自ヤウ

⑳ 俗或糞正、方向反 ツチ

切 ツチ

石 常隻反 イシ ツチ アツシ

礎 丁回反 ウスシ ハフル 又礎 ツチ ウツ

碓碎 タ、ク

槌 音堆 ツチ ウツ ツク

椎 音錘 ツチ ウツ 音錘 シヒ

槌 (椎ニ) 同

擣衣杵 ツチ

鎚 音槌 カナツチ ツチ ウツ 鍛、重、アカ、ネ 又音堆 ③②、俗云半 ③③

③④ 鋌 俗正音 ③⑤ ツチ ウツ 子ル 子リカ子 銅鐵之環未成器用者也

鉄 音夫又府 マサカリ 子リカ子 ハリ トサシ ウツハモノ ツチ

(1) クリ

『倭名類聚抄』は、「涅」「水中黒土」に「久利」の倭名をあて、

「②⑧」「土色黒」に「久呂豆干」を、「泥」「土和水」に「比知利古」「古比干」をあててゐる。これらの関係を図にすれば、下図のやうになるであらう。

『享和本新撰字鏡』に「黒 黒泥久呂豆干」と訓むこと、また

『類聚名義抄』に「土 クリ」「涅 クリ クリハム クリツチ クリニスレ

トモ」③⑩「クリ」「泥 クリニス」と訓み③⑩「クロシ」と訓むことを考へ合はせれば、クリとはその色——黒クロ——から名付けられたものである、と考へてよからう。更に言ふならば、クラシ(暗し)・クル(暮る)・クレ(暮)も又、クロ(黒)と同根であらう。

ところで、『類聚名義抄』に「涅 クリハム クリニスレトモ」「泥 クリ

ニス」と訓む時、クリは如何なるものであるのか。「〜ニス」とは、

対象物を或る状態から

別の状態に移行させる

所の主体の動作を表は

してゐる。「ハム」は、

後述するやうに、「彫

エル」であると考へる。

——ここに、クリと音

の近似したクレの語が

考へ合はされてくる。

「泥 ツチクレ」のクレ

である。

先に示した如く、『新

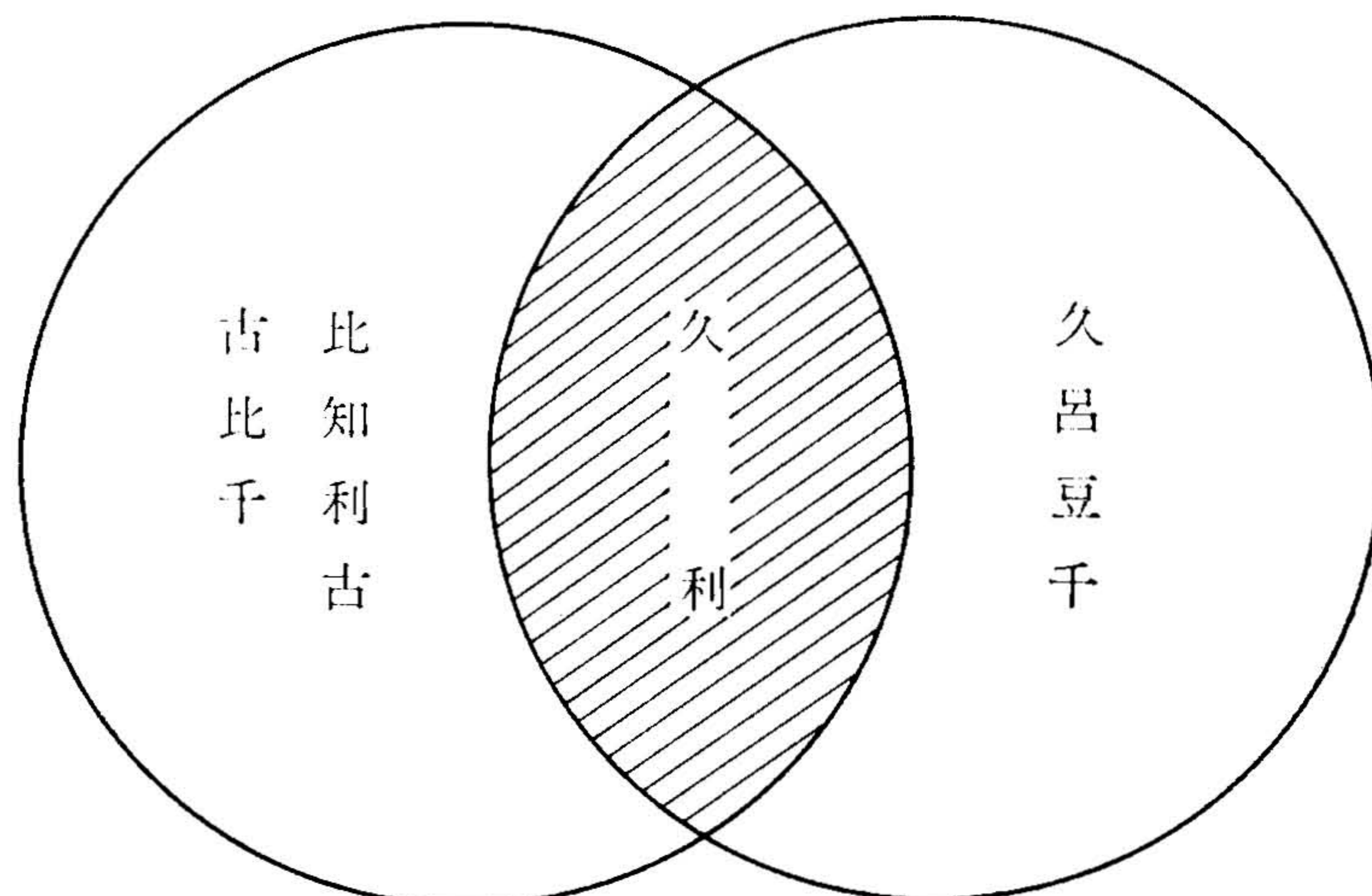
撰字鏡』に「塊」を「豆知久礼」、『倭名類聚抄』に「土塊 塊土片

を「豆知久禮」と訓む。そして『類聚名義抄』では「泥」③⑥「③⑦」

「堆」③⑧「③⑨」「塊」④⑩「④①」を「ツチクレ」、「埴」④②「④③」

を「土クレ」と訓んでゐる。「塊土片」より、土の固まったものが

ツチクレであると考へられるが、『類聚名義抄』に「カハラ」とも



訓む「④」「搏」を「ツチクレ」「土クレ」と訓んでゐることより、自然の土の塊のみならず、人工の土製品をも「ツチクレ」と呼んだのではないか、と考へる。先の「涅」「泥」の「クリニス(レドモ)」「クリハム」は、その土製品の製造過程を言ふものではなからうか。

そしてまた『類聚名義抄』に、「石」と同じく「泥」をも「カタシ」と訓むのも、以上のやうな「ツチクレ」の解釈と結びつけることによつて解けるのではないだらうか。

(2) ツチ

さて、『類聚名義抄』に「土」「石」とともに「ツチ」「イシ」と訓むことは、「土」と「石」との間に概念の相通があつたことを語るものと考へるが、更に「礎」「槌」「椎」「櫛衣杵」「鎚」「鋌」「鉄」を「ツチ」ないし「ウツ」と訓むに至る所に、「ツチ」の語源が「ウツイシ」であつたのではないか、といふ思ひがする。ものを平らにしたり、或る形に形造る為に、堅い土の塊||石製の道具——ウツイシ打石——を使用したのが、訛つて「ツチ」と名付けられた。そして時代が下り、木製や金属製の道具が出現すると、それらも「ツチ」と呼ばれたのではないか、と思ふのである。これは現在の所、仮想にとどまるが、ここに

「平却 地奈良須」(『新撰字鏡』)

ヌバタマの語源

「②⑥ 土乎福也須」(同前)

「泥 ナヤマス」(『類聚名義抄』)

とともに

「鋌 ウツ子ル子リカ子銅鐵之環未成器用者也」(同前)

「鉄 子リカ子」(同前)

の訓のあることに注意しておきたい。

(3) ヌル

ところで、「泥」は「ヌル」とも訓む(『類聚名義抄』)。「ヌル」は、「壁」「壑」「涅」「④②」「④③」「④④」「④⑤」「④⑥」などに通ひ(『類聚名義抄』)、泥や粘土(粘土)をものの表面になすりつける、ないし、その結果、壁を作つたり、盛りあげ延ばして塗ミチを作ることを言ふ。

田の土(||泥||涅::クリ)を盛りあげ塗り固めた(::ヌル)田と田との境界や塚をクロと呼ぶのも、蓋し、クリからの命名であつたらう。

「壠 塚也久呂」(『享和本新撰字鏡』)

「畔 クロ」(『類聚名義抄』)

「畦 クロ」(同前)

「壠 ツカクロ」(同前)

「坡」もまた「ヌル」と訓む(『類聚名義抄』)。これは「フサク」

とも訓み(同前)、『新撰字鏡』に「填也塞也」と記される。更に「填」は「鎮」「瑱」に通ひ、『倭名類聚抄』に「瑱」を「④々不太岐」と訓んでゐる。いはゆる耳栓である。

中国に於いて「填」「鎮」「瑱」の役割は、もと耳を塞ぐものより、耳に飾るものに移って行った、と考へるが、我が国に於いては玦状耳飾が先に有り、耳栓と呼ばれるものは後に発見されてゐることとは、我が国に於いて耳玉とは、装飾品としての耳飾が先であつた、そしておそらくは耳栓も装飾品としてのものであつた、ことを表はすものであらう。即ち我が国の耳飾(耳玉)を考へるに、耳を塞ぐ——ヌル——玉の義は考慮に入れなくてよい、と考へる。

四

先に掲げた如く、『類聚名義抄』に「泥」を「ヌル」と訓み、さらに「濇」を「ヌメリ」、「沼」を「ヌマ」と訓む。

ヌル、ヌメリ、ヌマ、更にはヌマル、ヌメル、ヌメヌメ、ヌラヌラ、ヌラリ、ヌラツク、ヌラメク、ヌルヌル、ヌカル、ヌカリミ、ヌカルミ、など同根で、すべて泥濇性に関する語である。(泥濇性とは、泥の粘土質を有する所に掘るものである。)その根とはヌに他ならない。即ち、ヌは泥・黏土(粘土)を意味することばではなかつたか、と考へる。

「泥」——「濇」……ヌ

一に記した如く、

「沼」——「泥」——「黒」

を関連づける説があるのであるが、「泥」をヌマとしてよいであらうか。

「沼」は泥地であり、元来「泥」そのものと混然としてゐたと考へられる。よつて、「沼」と「泥」とを同一視し、「泥」と「黒」とを結びつけることに異論はない。ただ、右に掲げた語群、とりわけ、「泥」に深い関係のあるヌカル、ヌカリミ、ヌカルミなどの語を考へる時、〈「泥」を表はす語〉はどうしても、ヌマではなく、ヌであつた、と考へる他ないと思はれるのである。

上代、「沼」はヌマと名付けると同時に、コモリヌ「許母利奴」

(萬葉17・三九三五)・「隠沼」(萬葉2・二〇二)、ヲヌ「小沼」

(萬葉12・三〇二二)などのやうに、ヌとも名付けた。『倭名類聚抄』にも「沼 和名奴」と記されてゐる。そのヌこそが「沼」の根の意味であつて、それが〈泥地〉であるといふ概念をはつきりさせる為に、マはあとからつけ加へられた語である、と考へる。「沼」ヌマのマは、『萬葉集』卷十一・二七〇七

青山の石垣沼間の水隠りに戀やわたらむ相ふ縁を無み

にも見られる通り、「間」マであつたらう。

「間」は『類聚名義抄』に「サカフ」の訓をもつが、サカフの名詞形はサカヒである。——「界 サカヒ」(『類聚名義抄』)

サカヒは、「界」「邊」「區」「境」などとも記されるやうに(『類聚名義抄』)、もと空間と空間とを区切る線から、更にはその周辺を言ふもの、ひいては「場 サカヒ」(『類聚名義抄』)の如く、その区切られた空間全体を指す語である。

而して、この「場」——「間」……サカヒへ区切られた空間へこそがヌマのマに関するものであったらう。「場」はまた「ニハ」と訓む(『類聚名義抄』)が、それは「ニハVバ」として「マ」に通ふ音韻でもある。

以上に述べたことから、「沼」はヌとして「泥」と結びつき得、また、ヌバタマのヌバはヌマ「沼」に拠るものではない、と考へる。それでは、ヌバとは何であったのか。

五

先に泥の泥濁性から、ヌは泥・黏土(粘土)を意味することばであった、と想定した。

『類聚名義抄』に

「④⑦ 黏土」「④⑧ 正」

『倭玉篇』に

ヌバタマの語源

「④⑨^カ クサ 子バツチ」

とあり、現在の「葦」がこれにあたると考へられる。^⑩

「④⑦」が黏土のことであることは、先に述べた『類聚名義抄』の

「④② ヌル」「④③ 正」

「塗 ヌル」

に関するであらう。

さて、ネバツチのネバはネバル「黏(粘)」の義であらう。『類聚名義抄』に

「黏^{⑤①} ノリ 子ヤカル」

「糊粘^{ノリ子ヤス} 二或黏字」

「粘 俗通黏字 アメツク 子エツク」

と訓む。ネバルはネユに同じく、またネバス・ネヤスは「練ってねばるようにする。ねちねちした状態にする。」(『日本国語大辞典』)

ことであり、ナヤス・ナヤマスにも通じる。ここに、三に述べた

「④⑥ 土乎糲也須」(『新撰字鏡』)

「泥 ナヤマス」(『類聚名義抄』)

が思ひ起こされよう。『享和本新撰字鏡』に

「挺 謂作泥物也」

ともあり、それは造形にまで意味を広げるものである。

さらに『新撰字鏡』に

「冶 餘緒反銷也 爾也須也」

「⑤① 鍛 二形作都乱反搗也椎也鍊也 奈夜須也」

と訓むやうに、ネヤス・ナヤスは「金属を精練・鍛練する。」(『日本国語大辞典』) ことでもあり、金属の出現によって「冶」「鍛」にも適用されたものであらう。

ネヤス・ネル・ウツなどは物の製造過程に於いて使はれる語であり、

子リ 「鐵」 「⑤②」

ネリカ子 「⑤③」

子リカ子 「鋌」 「鉄」 「鉄」 (『類聚名義抄』)

などはその過程に於ける物を指すのであらう。ここでも、三に述べた

「鋌 ウツ 子ル 子リカ子 銅鑿之璞未成器用者也」

「鉄 子リカ子」 (『類聚名義抄』)

が思ひ起こされる。

ところで、『類聚名義抄』に

「鐵鑿 クロガ子 一云子リ アラカ子」

「⑤④ ネハカ子 クロカ子 クロカ子」

と訓むことにより、「⑤④」の「ネハカ子」はネバカネであり、「子リカ子」「銅鑿之璞未成器用者」に通じるもの、と考へる。「ネハ

カ子」と訓むものはこれ一例であるが、それがとくに「クロカ子」(黒金)であったことに注意したい。

「銅鑿之璞未成器用者也」が「子リカ子」であり、「鐵」が「子リ」、「⑤④」が「ネハカ子」である時、金属製のものを除いてネバタマ(ハネバス)といふものを考へるとするならば、それは石・珠製のものではなく、土製のものに他ならない。先にも述べた如く土製のタマは黒色であり、また「⑤④」「クロカ子」を「ネハカ子」(ハネバス)と訓むことは、

ネバ——クロ

に強い結びつきを認めてよいものと考へる。我が国で金属精練の行はれたのは鉄が最初であったことも考へ合はされよう。

へ土を造形して造り上げたタマ^{*}がネバタマであり、クロタマ^{*}である、と考へる。

さて、三に於いてヌルを考へたのであったが、「鍍」「鏤」もまた「ヌル」と訓む。『類聚名義抄』に

「⑤⑤ 金飾 トロモス ヌル 物 カラスキ チリバム」

「⑤⑥ キザム ヌル ホリハム チリバム ツルギ」

とある。このホリハム・チリバムのハムは、「飾」につながる「食ハム」(『類聚名義抄』)で、彫・造形のことを言ったと思はれる。

「涅 クリハム」

のハムも同じであらう。

即ち、「鍍 ヌル」「鍍 ヌル」は土・金属をへ造形するの意に近づく。

以上のことより、ネバスは、土・金属を練って（ネル）ねちねちした状態にすることから造形することへと意味を広げ、ヌルは、練った土・金属を材料に何かの表面になすりつけること、またその結果何かを造形すること、に重点の置かれた語であった、と見ることが出来る。ここに、ネル・ネバスとヌルに造形といふ相関関係を認めることができる。ヌバスの語は見出だせないのであるが、

ネル ヌル

ネバス ヌバス*

の結びつきを考へることは自然であらう。

ヌバタマとは、ネバタマへ土を造形して造り上げたタマのことであった、と考へる。それは黒色であり、また、その後我が国でも多く精錬された鉄が黒色であったことは、一層

ヌバ

——クロ

の結びつきを容易ならしめたであらう。

結

以上の考察から、へ土を造形（ネバス）して造り上げたタマ（黒色）がネバタマ——ヌバタマと呼ばれた。やがてタマの素材が珠玉類にうつった時、ヌバタマはその本来の意味を失ひ、ヌバは単に土製のタマ（土）のもつてゐたへ黒色といふへ色をさし示す二次的な意のものに推移して行つたものであり、更には、土製のタマがかへりみられなくなった時、ヌバタマはへ烏扇（檜扇）の実の呼び名となり、またヌバタマノとしてへ黒を喚起する枕詞に充実して行つたものである、と結論づける。

後に、いはゆる珠玉類がさかんに用ゐられるやうになると人々は、硬玉や碧玉の緑・瑪瑙の赤・琥珀の黄・真珠の白・水晶の紫などの色彩美や艶・透明感に魅せられ、更にはそれらを意のままにできる玻璃の出現（それは造形性にも富んでゐた）によって、土製のものをあまりかへりみなくなった。しかしながら、人々が黒玉に原初的な愛着をもつてゐたであらうことは、檜扇の実にヌバタマの名を与へたことに知れるのである。

注

① 福井久蔵氏『枕詞の研究と釈義』参照。

② 佐竹昭広氏「古代日本語に於ける色名の性格」（『国語国文』24巻6号所収）

- ③ 注②に同じ。
- ④ 沢瀉久孝博士『萬葉集注釈・卷第二』
- ⑤ 以上、縄文時代の記述は、吉田格氏「縄文時代の生活と社会―日常生活用具」(『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』所収)に拠った。
- ⑥ 以上、弥生時代の記述は、藤田等氏「埋葬」(『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』所収)を参照した。
- ⑦ 以上、古墳時代の記述は、亀井正道氏「衣服と装身具」(『日本の考古学Ⅴ 古墳時代下』所収)、小出義治氏「祭祀」(同前)、寺村光晴氏「玉生産」(同前)、高橋健自氏「鏡と劔と玉」、野間清六氏編『装身具』(日本の美術No.1)に拠った。
- ⑧ 伊達宗泰氏(奈良県立考古博物館)の御教示に拠る。
- ⑨ 表のうち、「瓊」「²²」は『倭名類聚抄』にはなく、また玉名の倭訓を有たない。故に、我が国にはこれらに該当するタマが存在しなかったのではないかと考へる。『類聚名義抄』に「¹⁹」²⁰タマキ」と訓み、『神代紀』に「瓊玉也。此云努。」と記すことも考へ合はされる。
- ⑩ 土製品とは、無論、粘土によるものである。これは、後の四五に関する。
- ⑪ ただし、『康熙字典』に「クサ」に該当する文字は「⁵⁷」「⁵⁸」「⁵⁹」「⁶⁰」「⁶¹」「⁶²」「⁶³」「子バツチ」に該当する文字は「董」⁴⁹「瑾」⁶⁴で、別字である。『倭玉篇』の「⁴⁹クサ」はそれらが混同されたものであらう。

(附)

右の論中に、ヌは泥・黏土を意味することばであった、と想定した。また、土の古称をニと言ふ。そこで、タマの古称であると考へられる「ヌ」「ニ」(瓊)を「泥」「土」に結びつけることが考へられる。

二に記した如く、土製のタマは、タマの歴史の当初より多数製造されてをり、その造形・彫刻も容易で、人々の身近にあるものであった。二に於いては黒玉は土製のものが一般的であったことを述べたにとどまったが、「ヌ」「ニ」(瓊)が「泥」「土」に拠るものであるとするならば、これが黒玉であり、土製のもの、即ち黒色のものが玉として一般的であった、といふことになり、「クロタマ」の語が存在しないのは、タマといへばもと土製のもの(黒色)をさしたからであった、といふ推測が為され得よう。

備考

本稿中、とくに断らないかぎり、『新撰字鏡』は天治本、『倭名類聚抄』は天和古活字本、『類聚名義抄』は観智院本を使用した。

付記 黒玉の調査に際し、伊達宗泰氏の御教示を頂きました。ここに記し、深謝申し上げます。(五二・七・二二)

難字表

印刷の都合で本文中に記号で代用した漢字をここに示す。

- ① 璞
- ② 瑀
- ③ 璃
- ④ 璣
- ⑤ 瑠
- ⑥ 璠
- ⑦ 珊
- ⑧ 珣
- ⑨ 瑠
- ⑩ 璠
- ⑪ 腦
- ⑫ 砒
- ⑬ 玳
- ⑭ 璠
- ⑮ 腦
- ⑯ 惻心
- ⑰ 瑤
- ⑱ 土
- ⑲ 瓊
- ⑳ 瓊
- ㉑ 瓊
- ㉒ 璫
- ㉓ 瓊
- ㉔ 瓊
- ㉕ 瓊
- ㉖ 挺
- ㉗ 指
- ㉘ 壚
- ㉙ 盧
- ㉚ 潘
- ㉛ 糞
- ㉜ 歎
- ㉝ 熨
- ㉞ 鉸
- ㉟ 挺

- ③⑥ 磁
- ③⑦ 堊
- ③⑧ 塲
- ③⑨ 塲
- ④④ 塲
- ④⑤ 塲
- ④⑥ 塲
- ④⑦ 塲
- ④⑧ 塲
- ④⑨ 塲
- ④⑩ 塲
- ④⑪ 塲
- ④⑫ 塲
- ④⑬ 塲
- ④⑭ 塲
- ④⑮ 塲
- ④⑯ 塲
- ④⑰ 塲
- ④⑱ 塲
- ④⑲ 塲
- ④⑳ 塲
- ④㉑ 塲
- ④㉒ 塲
- ④㉓ 塲
- ④㉔ 塲
- ④㉕ 塲
- ④㉖ 塲
- ④㉗ 塲
- ④㉘ 塲
- ④㉙ 塲
- ④㉚ 塲
- ④㉛ 塲
- ④㉜ 塲
- ④㉝ 塲
- ④㉞ 塲
- ④㉟ 塲
- ④㊱ 塲
- ④㊲ 塲
- ④㊳ 塲
- ④㊴ 塲
- ④㊵ 塲
- ④㊶ 塲
- ④㊷ 塲
- ④㊸ 塲
- ④㊹ 塲
- ④㊺ 塲
- ④㊻ 塲
- ④㊼ 塲
- ④㊽ 塲
- ④㊾ 塲
- ④㊿ 塲

予 告

○昭和五十二年度萬葉学会大会（十月一日（土）～三日（月））

当学会本年度（通算第二十九回）大会を、武庫川女子大学との共催により、左記の要領で開催いたします。すでに、本誌前号本欄をもつての御案内により、七月三十日を限って懇親会・萬葉旅行のお申込を承りましたが、変更（取消しを含む）・新規申込をなさるお方は九月二十四日（土）までに、後記の武庫川女子大学（清原和義氏）あてにお申し出ください。

なお、第三日の集合地変更いたしました。御熟覧ください。

一、日程

第一日

公開講演会（十月一日（土）午後二時～五時半）

会場 武庫川女子大学文学部第一学舎（詳細別記）

挨拶

武庫川女子大学学長 日下 晃氏

淡路島と萬葉集

武庫川女子大学教授 野中春水氏

上代びとの表現

学会代表 小島憲之氏

萬葉歌の技法

武蔵大学教授 神田秀夫氏

懇親会（同日午後五時四十五分より） 会費 四、〇〇〇円

会場 武庫川女子大学中央大講堂地下食堂特別室

第二日

研究発表会（二日（日）午前十時～午後四時半）

会場 武庫川女子大学第一学舎

萬葉集末四卷成立私考

北嶋 徹氏

——その表記法を手がかりとして——

人麻呂挽歌の「殯宮の時」をめぐって

武藤美也子氏

香具山之宮考

金本 朝一氏

アミノヒボコ伝承に対する覚書

小池 肇子氏

——その遍歴について——

「日本靈異記」上巻三縁と「道場法師伝」

寺川真知夫氏

一五五番歌の成立

塚本 澄子氏

「モロトラが練のムラト」試案

坂本 信幸氏

歌語りの一形態

渡辺 護氏

挨拶

学会代表 小島 憲之氏

第三日

萬葉旅行（三日（月）午前九時 神戸「三ノ宮」出発）

集合場所 神戸「三ノ宮」『新聞会館』前（詳細別記）

集合時刻 午前八時五十分

臨地指導 武庫川女子大学国文学教室

見学地 三ノ宮―須磨―(フェリー)―大磯―「松帆浦」

―野島暮浦(「野島の崎」)―伊弉諾神宮(「昼

食」)―慶野松原(「飼飯の海」)―淳仁天皇陵―

国分寺―洲本―大磯―(フェリー)―須磨―三

ノ宮

解散 遅くとも午後六時には解散し得るよう余裕をも

って出発地同所に帰着。

費用 五、〇〇〇円(フェリー乗船料・バス乗車料・

昼食・その他諸費を含む)

なお、雨天でも決行いたします。使用車は現地に詳しい淡

路交通(株)のものです。

二、萬葉旅行・懇親会の申込み

申込み先 〒663西宮市池開町六一四六

武庫川女子大学文学部国文学研究室(清原和義氏宛)

電話(〇七九八)四七一―二二二二

申込み期日 九月二十四日(土)

かならず、右期日までに、萬葉旅行・懇親会の各項を明記して、お申し込みください。

なお、懇親会費・萬葉旅行費は、学会第一日(十月一日)

予 告

に会場受付において申し受けます。

三、宿舎

お取り扱いいたしません。神戸市・西宮市・大阪市各地ともホテル・旅館・各共済組合関係いずれも十分受入れ可能の模様です。時刻表・共済組合手帳等御参照願います。神戸「三ノ宮」・大阪「梅田」から会場校まで、ともに四十分程度でお越しになれます。

「会場」案内(次ページ上段)

武庫川女子大学第一学舎(学院本部・文学部等所在)

兵庫県西宮市池開町六一四六(電話(〇七九八)四七一―三三三)

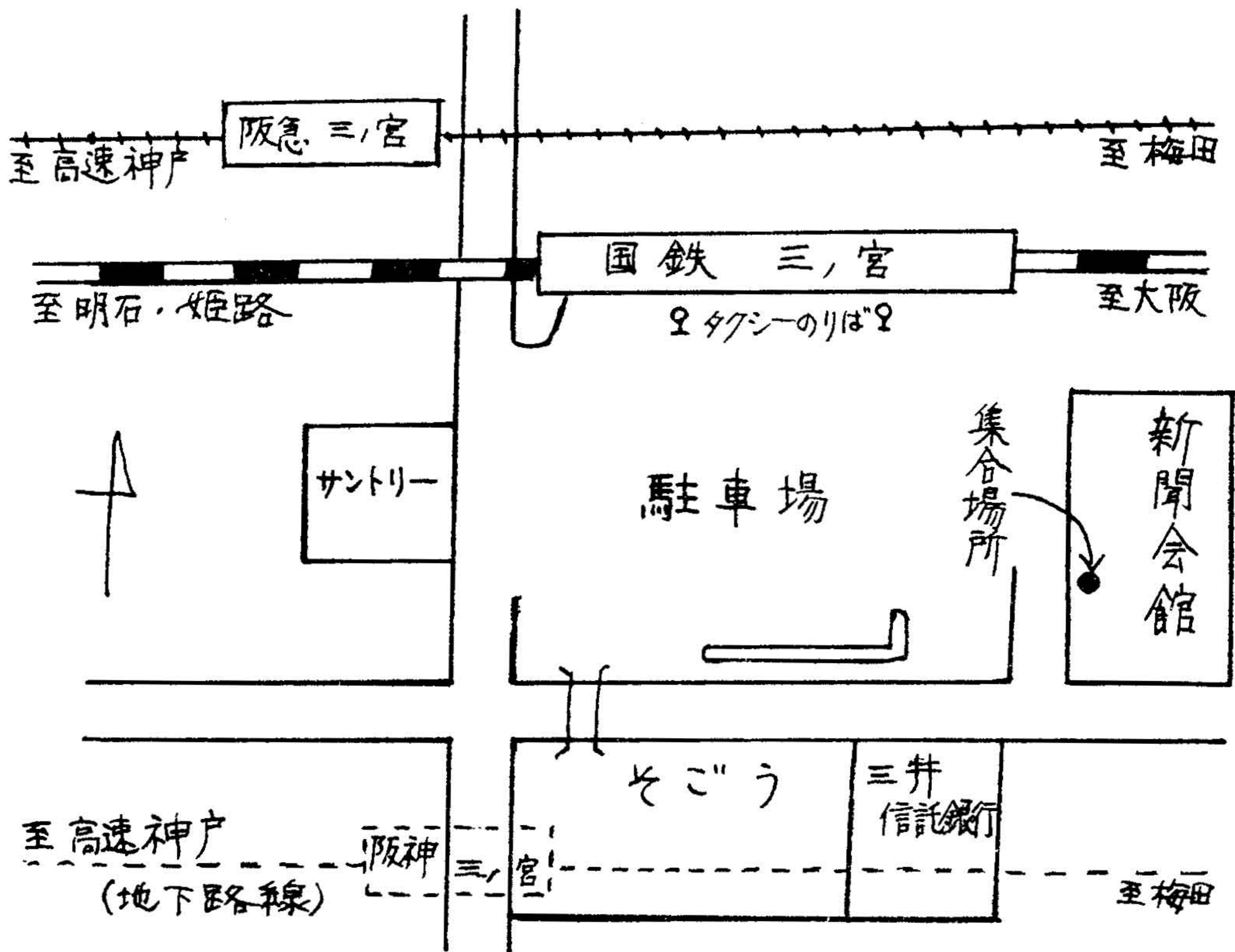
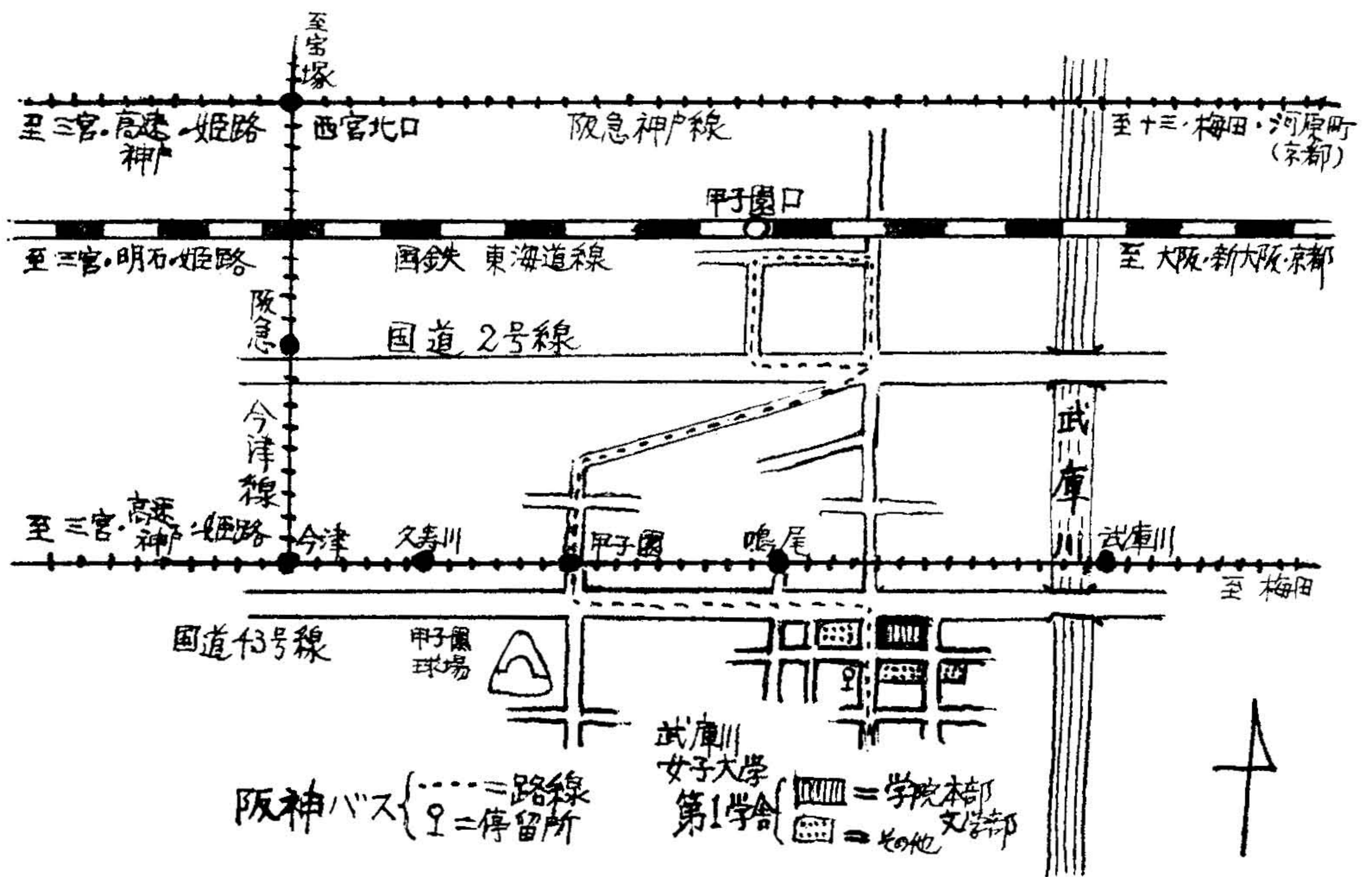
阪神電鉄「鳴尾」駅(なると)(急行停車せず)より徒歩七分。あるいは

国鉄「甲子園口」駅または阪神電鉄「甲子園」駅から阪神バス

(「東浜」行)で「武庫川学院前」で下車(もちろん、両駅からタクシー利用も可)。

「集合同所」案内(次ページ下段)

「新聞会館」は、山一証券と神戸新聞の広告が目立つビルです。このあたりは、長時間駐車不能ですから、定刻に出発いたします。せいぜい時間御励行願います。



○国文学研究資料館利用業務開始のお知らせ

去る七月二十五日(月)から、同館の諸施設が公開され、利用できることとなった。「利用案内」の抜萃が届けられたので、ここにお知らせする。

所在地 〒142東京都品川区豊町一―一六―一〇

電話 〇三(七八五)七二三一

最寄り駅 都営地下鉄一号線「戸越」、東急田園都市線「戸越公園」

閲覧時間 午前九時三十分～午後四時三十分

*複写受付と参考開架閲覧室は土曜日は十一時三十分を終了。

閲覧業務を休む日(外部者にとっての休館日)

- 一、日曜日、祝日、振替休日
- 二、毎月末日(その日が前項にあたるときは前日。四月末日が前項にあたる時は二十八日)
- 三、創立記念日(五月一日)
- 四、年末年始(十二月二十七日～一月五日)
- 五、蔵書点検期間(三月二十五日～三月三十一日)

利用できる者

- 一、大学教員・大学院生
- 二、所属学校・機関・図書館の長の紹介状を有する小・中・高校教員、研究員、学生

三、館長が適当と認める者

閲覧・複写のできる資料

- 一、現在までに収集した国文学文献資料のマイクロフィルム約三〇〇〇〇点の中整理済みの分約一〇〇〇〇点(三八ページ)の※参照(所蔵者の許可を得ていない分を除く)
- 二、国文学に関する学術雑誌・紀要約一三〇〇種
- 三、その他当館所蔵の和書および研究書、書誌等

参照できる目録

- 一、マイクロ資料については「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録」
- 二、図書については書名、著者名のカード目録
- 三、逐次刊行物については「国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録」

複写サービス

フィルム(ポジ)、紙焼写真、電子複写によるサービス。

参考業務

参考質問を受付ける。また「参考開架閲覧室」で参考図書の閲覧ができる。

お知らせ

※マイクロ資料について

左記の文献資料のポジフィルムまたは紙焼写真本の閲覧ができる。

所蔵者名 北海道大学附属図書館、北海学園大学附属図書館（北駕文庫）、東京大学国文研究室、東京大学国語研究室、東京教育大学附属図書館、鶴見大学附属図書館、名古屋大学国文研究室、名古屋大学国文研究室（小林文庫）、名古屋大学附属図書館（神宮皇学館文庫）、京都大学国文研究室（穎原文庫）、香川大学附属図書館（神原文庫）、九州大学附属図書館（細川文庫）、市立米沢図書館、酒田市立光丘図書館、刈谷市立図書館、県立長野図書館（関口文庫）、県立長野図書館（威徳院本）、県立長野図書館、彰考館、宮内庁書陵部、高松宮、東洋文庫、長野市（旧真田家本）、神宮文庫、本居宣長記念館、芭蕉翁記念館、松平公益会、武雄市（鍋島文庫）、金刀比羅図書館、射和文庫、和中文庫（計一〇八七八点）

萬葉歌人系譜

厚手上質紙（57×77cm）四色刷大図版
価五〇〇円 送料一二〇円

- 澤瀉久孝博士考案 蜂矢宣朗・大浜巖比古・吉井巖三氏補訂
- 「萬葉歌人系譜の見方」（別紙解説）つき 袋入り
- 揭示・携帯 いずれにも利便

特殊假名遣表

厚手上質紙B6判両面刷 一葉五〇円
送料六〇円

- 送達の都合上、なるべく、本誌既刊号、右「系譜」等に併せて、または同志相寄って御注文ください。
- 動詞・形容詞・助動詞 各活用表つき
- 上代文献解読用に常時必備の小道具
- テキスト・注釈書等に挿入至便

申込先 〒603 京都市北区小山堀池町二九

大地 廣部重汪

振替 京都四二八二八番

萬葉學會會員名簿

萬葉學會會員名簿

氏名 住所

ア

愛知教育大学 付属図書館	448	刈谷市井ヶ谷町広沢一	阿蘇瑞枝	170	東京都豊島区東池袋三七一四 寄池マンション二〇号
愛知県立大学 国文学研究室	467	名古屋市瑞穂区高田町三丁目	浅見 徹	502	岐阜市長良福土山三三三一九
青木生子	151	東京都渋谷区富ヶ谷一丁目三〇一三	阿蘇瑞枝	170	東京都豊島区東池袋三七一四 寄池マンション二〇号
青木紀元	916	鯖江市鳥羽町二四一六鳥羽宿舍一号	麻生朝道	814	福岡市西区城西団地三三三四
青山学院女子 短期大学図書館	150	東京都渋谷区渋谷四丁目四一五	跡見学園女子 国文学科研究室	352	埼玉県新座市中野町一九一六
秋間俊夫		Department of Asian Languages & Literatures University of Auckland New Zealand	跡見学園女子 大学図書館	352	埼玉県新座市中野町一九一六
秋本吉徳	180-04	東京都清瀬市元町一六一六 大橋マンション二〇二一	新井栄蔵	612	京都市伏見区深草大亀谷万帖敷町三四一三
吾郷寅之進	630	奈良市佐紀水上池東町二〇四六	新垣幸得	192-02	東京都多摩市落合三〇九一〇
浅井 勇	583	大阪府羽曳野市古市一丁目四一五	荒木 敏	654	神戸市須磨区潮見台町五丁目三一九
浅井正弘	398	長野県大町市大町区神栄町二七七	アララギ発行所	154	東京都世田谷区玉川美津町一三三三
浅田洋子	661	兵庫県尼崎市東難波四丁目二一四	有田耕三	411	三島市大社町二二七七
浅野 晃	228	相模原市上鶴間三三三三	伊井 敏	426	藤枝市新南新屋二六一六
			飯田瑞穂	343	越谷市北越谷二一八一三
			飯塚 誠	374	館林市本町四丁目三一三
			筏 勲	564	吹田市千里山西二丁目九一三

イ

五十嵐三郎	062	札幌市月寒西三条五丁目	井手	至	590-01	堺市高倉台三二二四
池上禎造	606	京都市左京区一乗寺松原町三	糸井	久	182	調布市下石原五六羽入方
池田弥三郎	158	東京都世田谷区玉川一丁目六一〇	糸井通浩	浩	790	松山市祝谷三丁目五〇六
石井和子	164	東京都中野区上高田二丁目六一二	伊藤博	博	191	東京都日野市程久保五三二三
石井純子	983	仙台市二軒茶屋〇一〇 細川方	稲岡耕二	二	180	東京都武蔵野市吉祥寺北町三一七
石井庄司	112	東京都文京区目白台三丁目九二〇	稲益保寿	寿	439	静岡県掛川市掛川三六〇一
石井秀夫	153	東京都目黒区碑文谷五丁目六一七	稲垣考俊	俊	441-12	愛知県宝飯郡一宮町大字金沢字内貝津二〇
石川格	320	宇都宮市花園町一六	稲村栄一	一	690	松江市上乃木町三五二五
石川博久	551	大阪市大正区三軒家東二八二三	犬養孝	孝	663	西宮市今津山中町八二三
石田紀子	534	大阪市都島区中野町三八二二	井口貴史	史	330	埼玉県大宮市日進二二五九
石田肇	527-01	滋賀県愛知郡湖東町北菩提寺六六	井上和子	子	540	大阪市東区東雲町二二三
石田雄治	491	一宮市丹陽町三ツ井九〇一	井上寿一	一	810	福岡市中央区平丘町六
石橋晶子	591	堺市引野町二丁目二三	井上誠之助	助	673	明石市太寺一丁目三二二
石原英司	488	尾張旭市大字印場字東向畑二五二〇	井上親雄	雄	739-01	東広島市八本松飯田清水川三三三三
石原清志	610-01	城陽市久世小字下大谷六一八	井上富蔵	蔵	702	岡山市築港新町五二五
磯貝市右衛門	166	東京都杉並区成田西二丁目二〇二	井上治夫	夫	607	京都市山科区山科西野阿芸沢三五二一 G二三
板垣徹	115	東京都北区桐ヶ丘二丁目五 N三一三二号	井上温子	子	661	尼崎市塚口町四丁目五〇一七
伊丹昇	299-43	千葉県長生郡一宮町一宮二〇三六一三 名越方	井上博嗣	嗣	604	京都市中京区三条通神泉苑西入
伊丹末雄	943	新潟県上越市寺町二丁目四一六	井上恭英	英	569	高槻市松ガ丘二二一九
市村宏	184	東京都小金井市桜町一丁目八一三	井野口孝	孝	631	奈良市二名町五二二 寺本ハイツ B棟二〇三号

伊吹和子 108 東京都港区三田五丁目二一八—八〇九
 今井昌子 603 京都市北区大將軍西鷹司町三
 今井 優 630-02 生駒市菜畑町二四七—七
 今泉 進 156 東京都世田谷区上北沢一—三—八—五
 今西 実 632 天理市川原城町二五三
 今福 謙 526 大阪市城東区古市二—七—三〇
 大阪信愛女学院高校
 井村哲夫 569 高槻市安岡寺町二丁目七—六
 岩井亮次 632 天理市田部町一
 岩下武雄 313 茨城県常陸太田市三才町九二
 岩下武彦 489 瀬戸市共栄通四—三—陶都アパート四二
 岩田武美 790 松山市和泉町九七
 岩手大書館 020 岩手県盛岡市上田三丁目八—八
 付属図書館
 岩波千鶴枝 157 東京都世田谷区成城町二丁目三—三
 岩波芳二 176 東京都練馬区桜台二—一
 岩野敬司 569 高槻市大塚町二—三—八
 岩野佳美 710 倉敷市西田五〇
 岩淵俊夫 320 宇都宮市今泉町三三—二
 岩松空一 747-13 山口市上小鯖字中村三—一

ウ

植垣節也 661 尼崎市東富松字上之フケ三五—一六
 上島史朗 606 京都市左京区下鴨芝本町三
 上田設夫 680 鳥取市吉方町二丁目四六五
 上田吉晴 612 京都市伏見区深草大亀谷八島町三
 墨染アパート別館八号
 上妻洋一 171 東京都豊島区池袋四—一七五〇桂荘
 上野理 346 埼玉県久喜市東五—三—二七
 上野務 602 京都市上京区相国寺南門前町三三
 上野尚美 591 堺市日置荘北町七〇—四
 上野展子 630 奈良市川久保町三〇
 上野真砂子 292 木更津市畑沢九〇—二畑沢アパートA二—三
 上原浩一 770 徳島市中吉野町二—三—四
 内田賢徳 567 茨木市中津町三—一—五
 馬田義雄 590-05 泉南市幡代五二—三

エ

江口井子 182 調布市染地三—一—齒多摩川住宅(は)八—二—四—五三
 江頭勝子 813 福岡市東区御幸町公務員宿舍九—三
 衛藤兵衛 590 堺市奥本町一丁八—三
 江野沢淑子 154 東京区世田谷区若林一丁目四—三

愛媛大学法文学部 790 愛媛県松山市文京町三
 国語国文学研究室

永広 禎夫 640 和歌山市下町八番地 雄湊ハイッ六三
 江間 秀明 432 浜松市入野町四三
 遠藤 邦基 606 京都市左京区下鴨上川原町三
 遠藤 宏 194-01 東京都町田市鶴川二丁目五―九―二〇四
 遠藤 嘉基 606 京都市左京区下鴨上川原町三

才

及川 敬一 084 北海道釧路市大楽毛三八釧路工業高専内
 大井重二郎 607 京都市山科区四ノ宮川原町二
 大川 清司 063 札幌市西区手稲東二条北五丁目三
 扇畑 忠雄 980 仙台市荒巻北杉山一―四一
 大久保 正 108 東京都港区高輪一丁目四―三 高輪住宅二七
 大久保 広行 336 浦和市三室字西宿二四六
 大倉山文化科学研究所 222 横浜市港北区太尾町大倉山
 大越 寛文 779-11 徳島県那賀郡羽ノ浦町宮倉
 大阪樟蔭女子大学国文学研究室 577 東大阪市菱屋西二五
 大阪市立大学国文学研究室 558 大阪市住吉区杉本町四九
 大阪城南女子短期大学国文学研究室 546 大阪市東住吉区矢田住道町八四
 大阪成蹊女子短期大学国文学研究室 533 大阪市東淀川区相川中通二丁目五

大阪大学教養部国文学研究室 560 大阪府豊中市待兼山町一
 大阪大学文学部国文学研究室 560 大阪府豊中市待兼山町一
 大阪府立工業高専国語研究室 572 大阪府寝屋川市幸町
 大島 文雄 930 富山市城北町六一九

大島 義信 379-21 前橋市駒形町二九―三
 太田 善磨 170 東京都豊島区巢鴨四―二―二
 大谷 治 573 枚方市東香里二丁目一―三
 大谷女子大学図書 584 富田林市錦織志学台

大谷大学文学部国文学研究室 603 京都市北区小山上総町
 大塚 昌秀 444 愛知県岡崎市柱町字世戸荒子三―四
 大坪 併治 703 岡山市福泊一―三
 大西 福男 673-14 兵庫県加東郡社町社二四六―二
 大野 晋 188 東久留米市氷川台一丁目二四―五
 大野 保 176 東京都練馬区小竹町二―三
 大野 雍熙 060 札幌市南二十条西十三丁目
 大橋 千代子 174 東京都板橋区徳丸三―一九―三
 大畑 幸恵 173 東京都板橋区大山東町五―三
 大浜 真幸 632 天理市勾田町三三
 大森 正雄 610-01 城陽市長池里開三

岡内弘子	271	松戸市松戸三丁目三〇三	横山荘
岡崎芳三	601	京都市南区吉祥院里ノ内町三〇	
岡嶋秀仁	632	天理市田井庄町三六―二	
岡田清子	182	東京都調布市深大寺二〇二	
岡田真	659	兵庫県芦屋市若宮町三一六	
緒方礼子	868	熊本県球磨郡相良村川辺二七四	
岡谷民男	780	高知市神田五九―九	
岡部政裕	420	静岡市安東三丁目二〇―三	
岡本勲	603	京都市北区小山下総町四―二	
岡本準水	166	東京都杉並区成田西四丁目二〇―六	
岡山就実短期 大学図書館	703	岡山市西川原六八	
岡山大学国文学 研究室	700	岡山市津島	
奥野綾子	603	京都市北区衣笠西馬場町四〇	
奥野健治	630-02	生駒市西旭ヶ丘九―三	
奥村恒哉	890	鹿児島市氷吉町二五 県公舎廿号	
奥村真理子	603	京都市北区上賀茂北ノ原町六	
小倉康雄	243	厚木市厚木七五	
尾崎富義	420	静岡市瀬名二六二	
尾崎暢殃	161	東京都新宿区下落合四―一―三	
押部佳周	663	西宮市甲子園六―一〇―二	
押見虎三二	940	新潟県長岡市土合四丁目四―一六	
小田時子	730	広島市上幟町五―一六	
小田寿雄	545	大阪市阿倍野区阿倍野筋一丁目六―一八	
小野寛	192	八王子市谷野町みつい台二―三―九	
小野寺静子	001	札幌市北区新琴似十条三丁目	
澤瀉 蕙子	603	京都市北区等持院南町三	
折戸耐次	470-35	愛知県知多郡南知多町篠島字神戸四二	
貝谷洋子	589	大阪府南河内郡狭山町西山台四丁目一―五―二三	
学習院大学国語 国文学研究室	171	東京都豊島区目白一―五―一	
賀古明	158	東京都世田谷区奥沢一丁目五―五	
笠井昇	638	奈良県吉野郡下市町本町	
笠井紀子	213	川崎市高津区下作延二〇八四	
加地俊一	581	八尾市小阪合町一―六―九	
梶原晃	300-31	茨城県新治郡桜村 筑波大学学生宿舍三七―二三〇	
梶原展子	813	福岡市東区香椎鎧板五九―一	
春日和男	810	福岡市中央区谷一丁目一―八	
粕谷興紀	519-06	三重県度会郡二見町荘小中野七〇	
片山喜八郎	328	栃木市平井町六八 国学院大学栃木図書館内	

片山 武 467 名古屋瑞穂区高田町六丁目四

勝村 昭俊 509-03 岐阜県加茂郡川辺町西柝井四〇

桂 孝二 760 高松市仏生山町乙六―三

嘉手苺 千鶴子 251 藤沢市大鋸三三松田方

加藤 静雄 466 名古屋市昭和区車田町一四

加藤 雅敏 477 東海市横須賀町四の割二〇

加藤 礼子 457 名古屋南区道德通三―七

角川書店 辞書教科書部 102 東京都千代田区富士見二丁目三―三

門倉 浩 292 市川市曾谷七―〇―二

門前 真一 631 奈良市菅原町四二―二

門前 正彦 636 奈良県北葛城郡王寺町本町四―九―九

香取 美樹 330 大宮市高木三〇

金井 清一 364 北本市本町五―一五

金井 寅之助 670 姫路市野里慶雲寺前町七七

金沢大学 図書部 920 石川県金沢市丸ノ内一―一

金沢大学 文学部図書室 920 石川県金沢市丸ノ内一―一

金本 朝一 550 大阪市西区九条南二丁目八―一

金森 健一 576 交野市私市一―三―一

鎌田 秀粹 654 神戸市須磨区大池町五丁目三―七

神尾 暢子 556 大阪市浪速区下寺町二―二―二
夕陽ヶ丘スカイハイツ六五

神山 孝一 591 堺市上五―七

亀井 孝 164 東京都中野区東中野一丁目三―三

加茂 徳明 432 浜松市鹿谷町一―〇

川上 徳明 042 函館市戸倉町三六 函館工業高専内

川上 富吉 359 埼玉県所沢市青葉台三〇六

川口 常孝 188 保谷市本町一丁目四―二〇

河野 あい子 601 京都市南区九条大路河原町東入 服部方

川野 文子 813 福岡市東区名島汐見町三五二

河野 頼人 803 北九州市小倉区板櫃町二〇番二―五二

川端 善明 606 京都市左京区一乗寺小谷町七

川辺 広美 514 津市河辺町三四

川村 幸次郎 135 東京都江東区森下四―二八

関西大学 図書部 564 吹田市山手町三丁目三―三五

関西大学 文学部 564 大阪府吹田市千里山東三丁目二―一

国文学 研究室 564 大阪府吹田市千里山東三丁目二―一

菅野 宏 960 福島市入江町四―一五

菅野 雅雄 196 東京都昭島市玉川町二―四―六

神堀 忍 565 大阪府吹田市千里山西四丁目八―三

キ

菊川 丞 655 神戸市垂水区西舞子四―七―八
ハウス大蔵山七七

菊 沢 季 生 501-25	岐阜市太郎丸四九一	木 下 正 俊 617	向日市鶏冠井山畑二一九
菊 谷 利 宏 634	檀原市五条野町二五〇一八一	岐阜大学教育学部 国語国文学研究室 502	岐阜市長良城之内
菊 池 威 雄 247	鎌倉市台五一一一三三	木 船 正 雄 500	岐阜市長良宮路町一一二
菊 池 毅 273	千葉県船橋市若松二一八一三二四六	九州大学国語 国文学研究室 812	福岡市東区箱崎
岸 正 一 577	東大阪市菱屋西一一六一二	京都教育大学 国文学会 612	京都市伏見区深草藤森町
岸 俊 男 630	奈良市押上町六〇	京都女子大学 国文学研究室 605	京都市東山区今熊野
岸 上 慎 二 251	藤沢市辻堂元町四一五二六	京都女子大学 国文学研究室 605	京都市東山区今熊野
岸 本 俊 彦 689-25	鳥取県東伯郡赤碕町出上三二	京都女子大学 国文学研究室 605	京都市東山区今熊野
岸 本 翠 593	堺市上野芝向ヶ丘町四丁二六九	京都女子大学 国文学研究室 605	京都市東山区今熊野
北九州大学図書館 802	北九州市小倉区北方	京都府立総合 資料館図書館部 606	京都市左京区下鴨半木町
北 嶋 徹 663	西宮市段上町一丁目二二三	共立女子学園 図書館 101	東京都千代田区一ツ橋二丁目一一
北 谷 幸 冊 630	奈良市東九条町二四四	清 原 和 義 573	枚方市北楠葉町三二五
北 野 達 124	東京都杉並区荻窪五一二一四 ライオンズマンション荻窪二〇二	ク	
北 原 淑 郎 599-44	長野県伊那市東春近三五七	久 島 茂 409-04	山梨県北都留郡上野原町川合三六九
北 村 英 子 577	東大阪市菱屋西三丁目三一六	楠 井 雅 子 617	向日市鶏冠井御屋敷三一七
北 村 行 進 461	名古屋市東区小川町三	工 藤 進 065	札幌市北十九条東五七七
北 山 茂 夫 606	京都市左京区修学院水上田町七	工 藤 力 男 502	岐阜市長良城之内 岐阜大学教育学部内
北 山 繁 良 675	加古川市野口町古大内六三	宮内庁書陵部 100	東京都千代田区皇居内
北 山 正 迪 606	京都市左京区吉田中大路町四		
木 下 玉 枝 351	和光市白子二丁目一三三		

国枝利久 602 京都市上京区六軒町通今出川上ル西側
 国本治雄 189 東京都東村山市富士見町一―四東台六一〇四
 久保昭雄 861-11 熊本県菊池郡西合志野須屋上原五七―二
 熊谷不二子 602 京都市上京区黒門通中立売下ル
 熊野直 180 武蔵野市吉祥寺北町一―三―五黒沢方
 熊本女子大学
 国文学研究室 862 熊本市大江二丁目七一
 熊本大学付属
 図書館 860 熊本市黒髪二丁目四〇―一
 糸川光樹 248 鎌倉市榑村ガ崎五―三七―四
 倉方春子 153 東京都目黒区目黒二丁目四―二
 蔵中進 653 神戸市長田区鹿松町三丁目四―六
 倉野憲司 816 福岡県大野城市上大利三六
 蔵野嗣久 731-01 広島県安佐郡安古市町上安二〇〇―三
 蔵堀正雄 931 富山市田畑新町一―六―四
 蔵本隆博 754-05 山口県美禰郡秋芳町秋吉
 栗城順子 591 堺市新金岡町三―六一―六
 栗巢政次 635 奈良県北葛城郡広陵町齊音寺
 黒岩駒男 830 久留米市御井町二六九―六
 黒川総三 933-01 富山県高岡市伏木古国府五―三〇
 黒川行信 653 神戸市長田区高東町二丁目一―二〇
 黒川洋一 606 京都市左京区吉田上大路町三〇

親縁寺内

黒沢幸三 631 奈良市疋田町登―二
 桑田明 761-01 高松市新田町甲六六一
 桑山靖子 673-02 神戸市垂水区神出町紫合五七
 群馬大学付属
 図書館 371 群馬県前橋市荒牧町三三五

ケ

芸林会 516 三重県伊勢市中村町桜ヶ丘二〇

コ

小泉道 790 愛媛県松山市東長戸四―三一―愛媛大学宿舍三三
 小磯純子 259-13 秦野市堀西六〇―四
 光華女子大学
 図書館 615 京都市右京区西京極葛野町三六
 皇学館大学付属
 図書館 516 伊勢市倉田山
 小路一光 165 東京都中野区若宮三丁目二七―六
 高知女子大学
 付属図書館 780 高知市永国寺町五―一五
 甲南女子大学
 付属図書館 658 神戸市東灘区森北町六丁目二―三
 鴻巣隼雄 214 川崎市多摩区千代ヶ丘四丁目二〇―一五
 神戸大学文学部
 国文学研究室 657 神戸市灘区六甲台町
 古賀精一 690 松江市西持田町祖母畑三三 公務員住宅二―二三

- | | | | | | |
|-------------------|--------|-------------------|------|--------|-------------------|
| 国学院大学
図書館 | 150 | 東京都渋谷区東四丁目二〇一六 | 小林茂美 | 188 | 東京都田無市南町四一五一六 |
| 国学院大学文学
第一研究室 | 150 | 東京都渋谷区東四丁目 | 小林久子 | 575 | 大阪府四条畷市中野一 |
| 国文学研究
資料館 | 142 | 東京都品川区豊町一丁目二六二〇 | 小林吉一 | 328 | 栃木市柳橋町三二三 |
| 国立図書館 | 110 | 東京都台東区上野公園 | 小林芳規 | 738 | 広島県佐伯郡廿日市町佐方三六六九 |
| 国立国会図書館
収書部資料課 | 100 | 東京都千代田区永田町一丁目二〇一 | 小原幹雄 | 690 | 松江市北堀町二九 |
| 国立国語研究所 | 115 | 東京都北区西が丘三丁目九一四 | 小平郁子 | 604 | 京都市中京区壬生坊城町二〇 |
| 国立北京図書館 | | 中華人民共和国北京(七)文津街一号 | 駒木敏 | 569 | 大阪府高槻市日吉台七番町八一九 |
| 小島憲之 | 569 | 大阪府高槻市柳川町一丁目八二三 | 小松光三 | 583 | 羽曳野市羽曳野五一一四 |
| 小島正敏 | 655 | 神戸市垂水区上高丸三丁目二七一四 | 小松晴彦 | 188 | 東京都田無市芝久保二二四一四 |
| 小島吉雄 | 572 | 大阪府寝屋川市秦二四 | 五味智英 | 161 | 東京都新宿区西落合一丁目二番二一號 |
| 清水卓二 | 630 | 奈良市二条町三丁目六一九 | 米田進 | 634 | 奈良県橿原市今井町三丁目七七一 |
| 小関清明 | 781-12 | 土佐市北地三六 | 米田勝 | 635 | 奈良県大和高田市秋吉二四 |
| 小谷博泰 | 654 | 神戸市須磨区磯馬川町六丁目一三五 | 近藤章 | 369-14 | 埼玉県秩父郡皆野町皆野八九一 |
| 後藤昭雄 | 424 | 清水市折戸二〇〇二保第二住宅七五 | 近藤信義 | 180 | 東京都武蔵野市御殿山二二六一二 |
| 後藤和彦 | 222 | 横浜市港北区大曾根町四六〇 | 近藤博子 | 259-01 | 神奈川県中郡大磯町国府本郷二四〇 |
| 後藤智恵子 | 371 | 前橋市千代田町五丁目三二三 | サ | | |
| 後藤利雄 | 990 | 山形市緑町二丁目〇一二 | 西郷信綱 | 211 | 川崎市中原区井田二六 |
| 五島和代 | 813 | 福岡市東区香住ヶ丘二丁目三二三 | 齋藤孝一 | 919-01 | 福井県南条郡今庄町今庄 |
| 小林温子 | 690-01 | 堺市原山台五丁目三三七八 | 齋藤定男 | 133 | 東京都江戸川区北小岩四一九一六 |

齋藤照夫	180-04	東京都清瀬市松山二丁目五十八	佐園泰男	675	加古川市粟津県営住宅一六号
齋藤光昭	990	山形市飯塚町二四七-一〇	佐田智明	803	北九州市小倉区徳力公団住宅三三-三四
佐伯梅友	155	東京都世田谷区代田二丁目四-三	貞光	501-31	岐阜市芥見諏訪山団地八〇-三七
坂井照弥	862	熊本市長嶺町二七六-一四	佐藤嘉一	874	大分県別府市朝見一丁目二-二
境田四郎	558	大阪市住吉区帝塚山西三-八二	佐藤一芳	662	西宮市苦楽園四番町三-四
阪倉篤義	606	京都市左京区吉田下大路町四	佐藤喜代治	980	宮城県仙台市子平町二〇-三〇
阪下圭八	186	東京都国立市富士見台三-二-一〇四	佐藤正一	940	新潟県長岡市宮原三丁目四-一六
佐賀大学 付属図書館	840	佐賀市本庄町一	佐藤真策	995	村山市楯岡二四-三
佐賀竜谷短期 大学付属図書館	840	佐賀市水ヶ江三-五-三	佐藤隆	452	名古屋市西区大野木一-三六
相模女子大学 図書館	228	神奈川県相模原市上鶴間	佐藤武義	980	仙台市荒巻字青葉 宮城教育大学青葉宿舍二-二
坂本信幸	630	奈良市古市町 春日苑二-一六	佐藤忠彦	069-01	北海道江別市大麻沢町二四-九
桜井治男	516	伊勢市桜木町三〇-三	佐藤亨	020	盛岡市箱清水一-〇-一六
桜井満	192-02	東京都稲城市坂浜三三三	佐藤寿子	080-24	帯広市西廿一条南二丁目二-四二
桜木幹雄	514	津市丸之内養正町七-五	佐藤美和子	606	京都市左京区銀閣寺前町二〇 シャトー銀閣二〇三号
迫野虔徳	862	熊本市東町四-二 東町南住宅二-二五	佐藤光子	733	広島市西観音町七-八
笹川泰伸	765	香川県善通寺市上吉田町二-三	佐藤保子	249	逗子市小坪二丁目六-三三
佐々木恵子	191	日野市程久保五〇-二六-五二	佐藤勇吉	632	天理市櫟本町二七五 櫟本西部市営住宅二四-三
佐々木茂子	464	名古屋市千種区新池町四丁目七	佐野愛子	589	大阪市南河内郡狭山町西山台二-二七-七
佐々木民夫	490-23	山形市大手町二〇-元	鮫島正英	891-01	鹿児島市中山町兜四-七
			三光迪	738	広島県佐伯郡五日市町藤垂園九-一〇

シ

- | | | | |
|---------------------|---------------------------------------|---------------|-------------------------------|
| 椎名嘉郎 327 | 栃木県佐野市浅沼町八―一 | 志水礼子 464 | 名古屋市千種区新池町二―〇 |
| 塩谷宗 182 | 狛江市和泉三六 青葉荘 | 下田忠 730 | 広島市戸坂町六一 |
| 滋賀大学付属図書館教育学部分館 520 | 滋賀県大津市平津二丁目五―一 | 下村梅子 662 | 西宮市高塚町六―八 |
| 重松啓子 604 | 京都市中京区壬生坊城町四―三
壬生坊城第二市街地住宅二号楼四一三三号 | 修猷館高校図書館 814 | 福岡市西区西新六丁目一―〇 |
| 四国女子大学 771-11 | 徳島市応神町古川字戎子野 | 寿岳章子 617 | 向日市上植野浄徳二―一 |
| 静岡女子大学 420 | 静岡市谷田四九 | 東海林弘 256 | 神奈川県小田原市小竹三三―七 橘団地三六―三 |
| 実践女子大学 150 | 東京都渋谷区東一丁目一―二 | 白江恒夫 553 | 大阪府福島区玉川一丁目四―五 |
| 四天王寺女子大学 583 | 大阪府羽曳野市殖生野三〇八 | 白藤礼幸 273 | 船橋市行田町五―四 船橋行田住宅五―一〇六 |
| 篠原良夫 491 | 一宮市貴船二丁目五―完 | 親和女子大学 651-11 | 神戸市北区鈴蘭台北町七丁目三―一 |
| 渋谷虎雄 662 | 西宮市五月ヶ丘四―三六 | 付属図書館 605 | 京都市東山区祇園町 八坂神社内 |
| 嶋稔 020-01 | 盛岡市緑が丘四―一七 | 新藤知義 372 | 群馬県伊勢崎市上泉町二九四 |
| 島田勇雄 658 | 神戸市東灘区住吉町宮守堂住吉南住宅二〇四 | 神道宗紀 589 | 大阪府南河内郡狭山町ぐみの木三三〇
美津屋マンション |
| 島津忠夫 458 | 名古屋市緑区ほら貝三丁目二九四 | 新聞一美 602 | 京都市上京区塔ノ段毘沙門町四七 佐々田方 |
| 島根大学 690 | 島根県松江市西川津町二〇六 | 菅原重兼 151 | 東京都渋谷区代々木四―六―一五 |
| 付属図書館 617 | 長岡京市梅ヶ丘一―四〇 | 菅原保 661 | 尼崎市武庫町一―五―二―三〇四 |
| 清水克彦 617 | 長岡京市梅ヶ丘一―四〇 | 須川安幾子 583 | 藤井寺市藤ヶ丘一―三―三 |
| 清水弥一 501-06 | 岐阜県揖斐郡揖斐川町森前 | 杉浦茂光 475 | 愛知県半田市太田町二―七 |
| | | 杉田篤子 280 | 千葉市畑町三〇三―一四 |

ス

杉本 栄 551 大阪市大正区泉尾中通三―二五―五
 杉山 康彦 214 川崎市多摩区宿河原三五六
 鈴江 幸太郎 617 長岡京市一里塚二―七―五〇四
 鈴木 敦子 649-66 和歌山県那賀郡那賀町名手上
 鈴木 一男 631 奈良市平松町五―六
 鈴木 太吉 441-13 新城市有海字下稻場五〇
 須田 善四郎 960 福島市山居三―一
 砂入 恒夫 180-03 東久留米市前沢二丁目二〇―九

セ

成城大学国文学 157 東京都世田谷区成城六丁目一―二〇
 研究室
 成城大学図書館 157 東京都世田谷区成城六丁目一―二〇
 聖心女子大学 150 東京都渋谷区広尾四丁目三―一
 国文学研究室
 清泉女子大学萬葉 141 東京都品川区東五反田三丁目二六―二三
 集研究サークル 清泉女子大学国文学研究室内
 星美学園 115 東京都北区赤羽台四丁目二―四
 短期大学国文科
 関守 次男 811-41 福岡県宗像郡宗像町自由ヶ丘三―一九―四
 瀬古 確 280 千葉市宮野木町二五―一〇
 芹沢 敏夫 174 東京都板橋区宮本町元―五
 専修大学文学部 214 川崎市多摩区生田七六
 国文学研究室

ソ

相愛学園図書館 541 大阪市東区本町四丁目二七
 首田 文雄 690 松江市菅田町三〇菅田宿舍三号
 外島 永見子 580 松原市阿保三丁目六
 園田学園女子 661 兵庫県尼崎市栗山字船子三三
 大学図書館

タ

大東文北大学 174 東京都板橋区高島平一―九―一
 図書館
 大東文北大学文学 174 東京都板橋区高島平一―九―一
 部日本文学研究室
 高田 敦子 630 奈良市油留木町三 岡田方
 高野 正美 192-01 東京都八王子市上川町三六―一
 高橋 和夫 180 武蔵野市吉祥寺本町四―二七―七
 高橋 克美 062 札幌市豊平区平岸四条十丁目八―二六
 高橋 善治 516 伊勢市中村町元―二 神宮みやま寮内
 高橋 正孝 520 大津市中庄二丁目二六―四
 高橋 芳江 125 東京都葛飾区金町五―一七―一〇
 ハイマート金町No1011
 高橋 六二 356 川越市大字今福一田園ハイツ一号楼二九
 高林 誠一 591 堺市百舌鳥赤畑町五丁六七

高原武臣	920	金沢市笠舞三―八―七	巽	康真	639-02	奈良県北葛城郡香芝町馬場三六
高原美忠	611	宇治市小倉町西畑四〇―一九	田中久美	630		奈良市法蓮町北二丁目井田方
高松政雄	501-11	岐阜市城田寺字大正六四―九	田中史子	711		倉敷市児島田ノ口五丁目二―五
滝原雅宏	655	神戸市垂水区名谷町三〇二	田中卓	516		伊勢市宇治浦田町四九
滝本典子	514-11	三重県久居市東鷹跡町二〇五―五	田中文雅	520		大津市中庄二―五―五
田口庸一	171	東京都豊島区长崎三丁目三―五	田中みどり	616		京都市右京区花園天授丘町三〇―二〇 天授荘八
武井睦雄	174	東京都板橋区清水町三―清水町住宅八―三三	田中宮義	532		大阪市淀川区十三本町三丁目二〇―一六
竹内和子	475	愛知県半田市成岩本町三―七	田中美子	661		尼崎市上の島地元三―二
竹内金治郎	166	東京都杉並区浜田山一丁目二―五	棚橋和枝	272		千葉縣市川市鬼越一丁目三―八
竹内美智子	152	東京都目黒区自由が丘三―一六―三―四―一	谷萩礼子	113		東京都文京区千駄木五―一九―一〇
竹尾正子	811-41	福岡県宗像郡宗像町自由ヶ丘五丁目二―四―一五	谷山茂	606		京都市左京区下鴨西高木町三
竹熊義孝	862	熊本市大江町五丁目二―一	田野登	553		大阪市福島区鷺洲二―二―三
竹島忠佐	573	枚方市渚元町三―一―〇	玉村文郎	604		京都市中京区三条通油小路東入ル塩屋町三
武智雅一	791-42	松山市高浜町二丁目二―七〇	檀野菊枝	601-13		京都市伏見区醍醐西大路町二―五―一六
竹中栄	546	大阪市東住吉区矢田住道町八七	チ			
武部弥十武	933-01	高岡市伏木東一ノ宮六―七	ツ			
武山真理子	335	埼玉県蕨市北町三―一―〇―一	中央大学図書館	101		東京都千代田区神田駿河台三―九
田島光平	426	藤枝市高岡一丁目一―七	塚本澄子	161		東京都新宿区上落合三―一五―四 白樺荘
多田実	299-52	千葉県勝浦市沢倉八―一	塚原鉄雄	525		滋賀県草津市草津一丁目二〇―三
辰馬悦蔵	662	兵庫県西宮市鞍掛町四―一六	築島裕	155		東京都世田谷区代沢一丁目二〇―一六

次田 真幸 165 東京都中野区若宮二一五—五

辻 憲男 663 西宮市田中町一丁目一—七—四〇一

辻 田昌三 659 芦屋市宮塚町三〇

辻 本一郎 654 神戸市須磨区天神町四丁目四—三

土 田知雄 338 浦和市大久保領家三〇—三

土 橋 寛 606 京都市左京区松ヶ崎呼返町八

土 屋文明 105 東京都港区青山南町五—二〇

都 竹通年雄 352 埼玉県新座市栄二丁目四—一六

綴 敏子 862 熊本市若葉一丁目三〇—三

恒 松 侃 485 愛知県小牧市藤島字砂原二七—五 藤島団地空

津 之地直一 440 豊橋市八町通五—一四

露 木 悟義 242 大和市中心二—四—二七—六〇五

鶴 久 818-01 福岡県筑紫郡太宰府町西五条三六—一八

都 留文科大學 402 山梨県都留市上谷二六六

鶴 見大學付屬 230 横浜市鶴見区鶴見二丁目一—三

テ

帝京大學圖書館 192-03 東京都八王子市大塚三六

帝塚山學院 589 大阪府南河内郡狹山町大字今熊二八三

短期大學圖書館 558 大阪府住吉区帝塚山中三丁目五

寺 川 潔 630 奈良市多聞町三

寺 川 節江 533 大阪市東淀川区東淡路町一—四、二—三七

寺 川 真知夫 533 大阪市東淀川区東淡路町一—四、二—三七

寺 田 順子 166 東京都杉並区高円寺南三—五—五

天 理大學 632 奈良県天理市杣之内町二〇五〇

天 理大學圖書館 632 奈良県天理市杣之内町二〇五〇

天 理大學圖書館 632 奈良県天理市杣之内町二〇五〇

ト

土 井 清民 166 東京都杉並区堀之内一丁目六—二七

土 居 美恵子 630 奈良市奈良坂町三—四 吉田方

土 井 洋一 171 東京都豊島区目白一—五 学習院大學文學部國文學科研究室

東京教育大學 112 東京都文京区大塚三丁目二—一

東京女子大學 167 東京都杉並区善福寺二丁目

日本文學研究會 112 東京都文京区本富士町

東京大學文學部 112 東京都文京区本富士町

東京都立中央圖書館 106 東京都港区南麻布五丁目七—三

同志社大學 602 京都市上京区烏丸今出川

同志社大學 602 京都市上京区烏丸今出川

同志社大學人文科學研究所資料部 602 京都市上京区新北小路町

- | | | | | | |
|-------------------|--------|-----------------|-------|--------|---------------------|
| 同志社図書館 | 602 | 京都市上京区相国寺門前町三十一 | 中川美登里 | 673 | 明石市東人丸町五十五 |
| 東北大学文学部
国文学研究室 | 900 | 仙台市片平町 | 中川幸広 | 243 | 海老名市さつき町一四一四〇三 |
| 東野治之 | 630 | 奈良市尼ヶ辻町四丁目甲四十二 | 中川芳雄 | 422 | 静岡市小鹿一丁目三十一六 |
| 遠山一郎 | 182 | 調布市佐須町三七一七 | 中島和子 | 560 | 大阪府豊中市原田元町二二五十五 |
| 東洋大学
国文学研究室 | 113 | 東京都文京区白山五丁目二六二〇 | 中島信太郎 | 675-11 | 兵庫県加古郡稲美町北山八二 |
| 東洋大学図書館 | 113 | 東京都文京区白山五丁目二六二〇 | 中島好昭 | 729-55 | 広島県比婆郡東城町小奴可 |
| 土岐善磨 | 153 | 東京都目黒区下目黒四一八二 | 中田義明 | 800 | 北九州市門司区大里本町一丁目五十五 |
| 徳永久子 | 602 | 京都市上京区室町出水上ル | 仲田芙美子 | 631 | 奈良市中山町泉ヶ丘三〇一三三 |
| 都倉義孝 | 181 | 東京都三鷹市大沢四丁目五十六 | 中谷正子 | 641 | 和歌山市和歌川町七十五 |
| 戸田輝夫 | 074 | 北海道深川市一己町二四孝 | 中塚公彦 | 565 | 豊中市新千里西町二丁目四A2棟六一〇号 |
| 富田大同 | 675-13 | 兵庫県小野市鹿野町三〇七 | 中西宇一 | 610-01 | 城陽市寺田垣内後七二 |
| 富森盛史 | 518-04 | 三重県名張市桔梗が丘二二二九 | 中西進 | 157 | 東京都世田谷区祖師谷六丁目六一二〇 |
| 友松孝行 | 871 | 中津市中殿町三丁目 | 中西則夫 | 454 | 名古屋市市中川区荒子町字大和ヶ池三 |
| 富山大学文学部
国文学研究室 | 930 | 富山市五福三〇 | 中西正雄 | 467 | 名古屋市瑞穂区松栄町一四 |
- 十
- | | | | | | |
|-------|-----|-----------------|------|--------|--------------------|
| 直木孝次郎 | 630 | 奈良市尼ヶ辻四丁目三 | 中原勇夫 | 840 | 佐賀市柳町六一五 |
| 仲正子 | 581 | 八尾市太田二五二 | 永原琢平 | 574 | 大東市北条一丁目三一九 |
| 中井武雄 | 451 | 名古屋市西区堀詰町一丁目六 | 中村隆彦 | 070 | 旭川市春光台二条二丁目 旭川工専宿舍 |
| 中川浩文 | 605 | 京都市東山区今熊野日吉町四七五 | 中村忠行 | 639-11 | 大和郡山市北郡山四〇 |
| | | | 中村久 | 251 | 藤沢市辻堂東海岸二二一八 |

中村宗彦 631 奈良市西登美ヶ丘八丁目四一〇
 中村行利 802 北九州市小倉区黒原本町一組
 中村幸彦 656-25 洲本市由良三丁目二一六
 中山昭道 301 竜ヶ崎市長峯町九四
 名古屋大学文学部国文学研究室 464 名古屋市千種区不老町
 夏目忠男 431-14 静岡県引佐郡三ヶ日町岡本六六
 納屋信 181 三鷹市中原一丁目五一六ほおじろ荘内
 奈良県立図書館 634 橿原市畝傍町
 奈良国立文化財研究所 630 奈良市春日野町五〇
 奈良女子大学附属図書館 630 奈良市北魚屋西町
 奈良大学図書館 631 奈良市宝来町三三〇
 成田登 038-02 青森県南津軽郡大鰐町字羽黒館五七
 鳴上善治 532 大阪市淀川区十三本町二丁目三二七
 成瀬八重子 553 大阪市福島区亀甲町二二三
 南波浩 606 京都市左京区吉田神楽岡町八

二

西尾実 166 東京都杉並区和泉町八五
 西岡将美 516 伊勢市倉田山皇学館大学内

西崎亨 632-02 奈良県山辺郡都祁村南之庄
 西野和子 151 東京都渋谷区恵比寿四一九一〇
 西之谷好 798 愛媛県宇和島市大浦一区
 西端幸雄 520 大津市長等三丁目三一六
 西原能夫 160 東京都新宿区一三四一三、六一
 西宮一民 516 伊勢市桜ヶ丘三〇一四
 二宮勝美 254 平塚市諏訪町三一七
 日本大学文学部図書館 159 東京都世田谷区桜上水三丁目三五〇
 日本文学協会 170 東京都豊島区南大塚二丁目二七〇
 日本女子大学図書館 112 東京都文京区目白台二丁目八一

ノートルダム清心女子大学図書館 700 岡山市上伊福町二丁目二六九
 野上久人 722 広島県尾道市日比崎町三一〇
 野口一郎 156 東京都世田谷区松原町三一二一五
 野口嘉生 068-06 北海道夕張市鹿島富士町四一八
 野田久子 410 静岡県沼津市真砂町二七
 野中春水 606 京都市左京区下鴨北園町二〇三四
 野村君代 591 堺市新金岡町一丁七一六二〇六
 野村重碩 177 東京都練馬区関町五一三

野村庄次郎 069-01 北海道江別市大麻団地宮町六番地B二二

花田瑞穂 036 青森県弘前市中野二丁目二八

ハ

城北ハイッシー四六

梅花女子大学 567 茨木市豊川宿久庄七二

土部 弘 536 大阪市城東区今福西二丁目七二六

芳賀紀雄 603 京都市北区小山下内河原町九二

土生田純之 537 大阪市東成区大今里二丁目五二四

迫 徹朗 860 熊本市黒髪二丁目元一
熊本大学法文学部国文研究室

浜口博章 659 兵庫県芦屋市親王塚町八一九

橋浦兵一 982 仙台市鹿野本町二〇二

浜田清次 780 高知市白石町三丁目七二五

橋本四郎 573 枚方市香里ヶ丘八丁目三二

浜中多紀子 586 河内長野市千代田南町八一七

橋本四郎 600 京都市下京区七条御所ノ内南町七

林田正男 814 福岡市西区別府団地二〇二四

橋本達雄 351 朝霞市宮戸一〇〇

Halla Istvan
Hungary, H-1148, Budapest,
Örs, Vezér tér 14, VII. 28.

橋本敏雄 674 明石市魚住町清水五二四 魚住コーポB二六

原田貞義 020 盛岡市夕顔瀬町二五八

橋本雅之 516 伊勢市中之町二〇九 麻吉旅館方

原田芳起 577 東大阪市小若江四八一九

蓮沼徳次郎 611 宇治市神明宮東九

Universite de Paris
Faculte des Lettres
et Sciences Humaines
57 Rue de La Sorbonne, Paris (V)

長谷川信好 544 大阪市生野区桃谷二丁目二五二〇

針原孝之 157 東京都世田谷区北鳥山四一四三

畑 恵美子 538 大阪市鶴見区今津北五八一三

春田助志 560 豊中市熊野町一丁目八一三 椿アパート

秦 俊子 613 京都市伏見区淀木津町六九

半沢正一 960 福島市宮町四一三

蜂 矢 宣朗 632 天理市守目堂町二五 おやさと五号館一〇三

半田萬葉研究会 475 愛知県半田市乙川太田町二一五 杉浦方

蜂 矢 真郷 663 西宮市高松町二一九

肥田野昌之 343 埼玉県越谷市南越谷三一五二二

服部喜美子 466 名古屋市昭和区御器所三丁目二五二三

花上しのぶ 191 東京都日野市日野三六二

花上しのぶ 191 東京都日野市日野三六二

肥田野昌之 343 埼玉県越谷市南越谷三一五二二

日吉盛幸 175 東京都板橋区西台二八一三清水方

平岡澄子 623 綾部市上野町九二二

平館英子 191 日野市日野七三三三宮原コーポ三二桑原方

平山城児 356 川越市下新河岸八一七

広岡義隆 514 津市上浜町五五三三重大学教育学部内

広島女子大学
付属図書館 734 広島市宇品東一丁目一七

広島大学文学部
国文研究室 530 広島市東千田町

広島文教女子大
学付属図書館 731-02 広島県安佐郡可部町上原三三六

広瀬捨三 590 堺市一条通五二五

広瀬誠 930 富山市星井町三丁目二三

広多建次 114 東京都北区滝野川六丁目三一四

広田二郎 115 東京都北区赤羽台一丁目四一四三二五二

広浜文雄 518-01 三重県上野市上神戸五二

フ

深沢三千男 584 富田林市錦ヶ丘町五二七

福井治男 611 宇治市伊勢田町砂田六一二九二

福岡教育大学
図書館 811-41 福岡県宗像郡宗像町赤間七九

福岡女子大学
図書館 813 福岡市東区香住ヶ丘一丁目一一

福島大学付属図書
館教育学部分館 960 福島市浜田町三一三

福島利顕 632 天理市柳本町山田三〇三

福島基喜 167 東京都杉並区清水三丁目二二三比留間方

福永静哉 521-11 彦根市野良田町三五

藤井専蔵 662 西宮市上ヶ原五番町二二

藤井毅 590 堺市一条通九一三

藤田福夫 465 名古屋市中区西里町四丁目五三

藤田昌弘 196 昭島市玉川町東中神団地三一六三

藤田勝 506-64 岐阜県瑞浪市釜戸町公文垣内三二

藤谷佳樹 047 北海道小樽市緑二二四一五

藤原英吉 710 倉敷市石見町四一五

藤原芳男 655 神戸市垂水区星ヶ丘三丁目一一四

藤本知代子 580 松原市河合町二一六一五

藤森賢一 634 奈良県橿原市五条野町二五〇一六

藤森祐 399-82 長野県南安曇郡豊科町豊科五七五

古屋彰 929-02 石川県能美郡川北村中島
「文学」編集部 101 東京都千代田区神田一ツ橋二二三
岩波書店内

G. Wenck

Hamburg Harksheide

Alter Kirchenweg 22. Germany

(251藤沢市鶴沼藤ヶ谷三―八―六 新田義之方)

ホ

法政大学図書館
資料室

102 東京都千代田区富士見二丁目七―一

保坂達雄

223 横浜市港北区綱島西五―二―五

星和子

167 東京都杉並区西荻南一―四―七

細江幸久

509-12 岐阜県加茂白川町上佐見三三六―一

細野京子

254 平塚市四ノ宮五九

北海道大学文学
部国文学研究室

060 札幌北八条西五丁目

堀田勝郎

780 高知市福井町三三

堀道子

579 東大阪市本町四―三六

堀井隆川

193 八王子市元八王子町三丁目三九七 真照寺

本位田重美

658 神戸市東灘区本山町岡本八丁目六一

本田義憲

610-01 城陽市平川車塚五

本田義彦

862 熊本市大江五丁目三―三三

本田義寿

612 京都市伏見区深草宝塔寺山町三 自得院内

マ

前田 淑

816 福岡市南区上日佐三三福岡女子学院短期大学内

卷山田鶴子

617 長岡京市今里字津久志三―一六

真下 厚

567 茨木市寺田町五―三七

増田茂恭

573 枚方市津田五三―七

松井美智子

583 羽曳野市野々上一―四―三

松浦孝一

997-03 鶴岡市大字中橋字村西五〇

松尾一夫

560 豊中市緑ヶ丘三―二―六

松尾 聡

107 東京都港区北青山二丁目二〇―一八

松尾玲子

665 宝塚市仁川団地三番二―四〇一

松下一夫

591 堺市大豆塚町一丁三 大豆塚第三団地二〇号

松島英明

376 桐生市堤町二丁目五―一

松田芳昭

720 福山市東深津町王子下三三六

松田好夫

489 瀬戸市鹿乗町三三六

待鳥ミチヨ

573 枚方市宮之阪五―五―一五

松長俊雄

632 天理市遠田町三六

松原博一

177 東京都練馬区大泉学園九七

松本公子

861-42 熊本県下益城郡城南町鰐瀬三三六

松本 剛

353 埼玉県志木市本町五―一五―七

真鍋次郎

799-14 愛媛県東予市宮之内四―一

馬淵和夫

170 東京都豊島区南大塚一丁目三六―三三

真弓常忠

559 大阪市住之江区北島三―四―三

丸山 顕徳 648 和歌山県橋本市神野々三二
政所 賢二 814 福岡市西区鳥飼六丁目二〇一八

三

三重大学
付属図書館 514 津市上浜町

三木 康 670 姫路市東魚町元
身崎 寿 350-13 狭山市狭山台三三三三狭山団地三三三三二四

三嶋 健男 632 天理市杣之内町二〇五〇 天理大学日本語科
水島 義治 194 東京都町田市本町田三〇〇六

三谷 栄一 156 東京都世田谷区桜一丁目三〇一九
三塚 貴 943 上越市西城町三丁目二一四 かねで荘七号室

三原 辰之助 535 大阪市旭区新森三一五二三
三辺 清一郎 658 神戸市東灘区住吉町鴨子ヶ原御影住宅六一〇二

三部 敏子 143 東京都太田区大森北三丁目二五二五
美夫君志会 468 名古屋市中昭和区八事本町二〇二 中京大学国文学研究室内

三間 重敏 530 大阪市北区天神橋筋五二二
宮岡 薫 569 高槻市柱本新町一番B三棟二〇二二号

宮城喜久蔵 563 池田市呉服町二一六
宮城教育大学
付属図書館 980 宮城県仙台市荒卷字青葉

宮崎 逸子 475 半田市有楽町六一三七

宮崎 健三 165 東京都中野区江原町三一七二七
宮地 伸一 121 東京都葛飾区東立石一八一九

宮地 由紀子 500 岐阜市東興町二一一
宮地 裕 564 吹田市江坂町四一五二二 コーポ野村江坂台三〇六

宮村 千素 614 京都府綴喜郡八幡町男山住宅二三一三二二
宮本喜一郎 663 西宮市上鳴尾町五二二

宮本 千史 720 福岡県飯塚市川島二
宮脇 光顕 675-13 兵庫県小野市新部町四四

三輪 知恵子 496 愛知県津島市鹿伏兔町西郷内三三

ム

武庫川女子大学
国文学研究室 663 西宮市池開町六一〇六

武藤 正夫 181 三鷹市牟礼六丁目三三 牟礼公団二六四
武藤美也子 658 神戸市東灘区北青木四一六一三

村瀬 憲夫 640 和歌山市黒田二六三二 井上マンション二〇二
村田 正博 300-31 茨城県新治郡桜村大字妻木三四九 紫峰荘A一三七

村田 通男 922-04 石川県加賀市塩浜町

村山 出 080 帯広市西五条南廿五丁目 桜谷方
村山 芳子 167 東京都杉並区天沼二二一五 宮内方

室田 浩然 579-65 下関市吉見局区内永田町二〇七

メ

明治大学図書館 101 東京都千代田区神田駿河台二一

モ

毛利 正守 545 大阪市阿倍野区松崎町二一九一三紀峯荘内

望月 郁子 420 静岡市北安東三〇一〇二〇美松ハイッB三〇五

籾山 文子 152 東京都目黒区洗足二丁目三三六

百瀬 順子 577 東大阪市中小阪五六

森 淳司 183 東京都府中市浅間町二丁目六一九

森 一郎 980 宮城県仙台市柏木三丁目九一

森 満人 517-04 三重県志摩郡浜島町大字浜島

森 実 420 静岡市馬淵一丁目九一七

森河百合子 113 東京都文京区千駄木四一八一二

森重 敏 631 奈良市学園南二丁目三二〇

森田 孝浩 582 柏原市旭ヶ丘三丁目一五九丸紅団地二三

森本 善信 652 神戸市兵庫区鶴越町六

森山 隆 814 福岡市西区飯倉七丁目六一三〇

森脇 一夫 177 東京都練馬区富士見台三一三二八

ヤ

八木 毅 480-11 愛知県愛知郡長久手村大字長湫
字城屋敷六一五

安河内 君江 836 大牟田市大正町四丁目六

安田 章 603 京都市北区上賀茂高繩手五

柳井 己酉朔 167 東京都杉並区高井戸西三丁目三二七

築瀬 秀司 063 札幌市北十三条西五丁目白樺通

山尾 孝司 658 神戸市東灘区岡本一三二二

山形 大学 690 山形市小白川町三四

山際 博 948 新潟県十日町市昭和町一丁目小川方

山口 堯二 612 京都市伏見区西奉行町伏見合同宿舍三

山口クルミ 222 横浜市港北区篠原台町四一六

山口女子大学 753 山口市桜島三一三一

山口 正 170 東京都豊島区北大塚三丁目六一六

山口 秀夫 662 西宮市愛宕山三一四〇

山口 昌子 565 大阪府吹田市青山台二丁目六B二〇一〇八

山口 佳紀 171 東京都豊島区长崎四丁目三一九

山崎 栄一 153 東京都目黒区大橋一六一三二五五

山崎 馨 662 西宮市名次町五二五

山崎 良幸 780 高知市加賀野井一丁目三二二三

山下光一 100-06 東京都神津島村三須賀原教員住宅

山田正 466 名古屋市昭和区八事本町三一六

山田敏夫 466 名古屋市昭和区川名町四一六

山田弘通 606 京都市左京区聖護院東町一

山田美保 615 京都市西京区桂坤町五〇一四

山田実 890 鹿児島市紫原一丁目九一三

山本登朗 610-11 京都市西京区大枝西新林町四一五一一三〇二

山本利達 525 滋賀県草津市馬場町三五

山本康裕 634 檀原市山之坊町五七

ユ

湯口誠一 606 京都市左京区松ヶ崎呼返町二一三

遊佐徳雄 031 青森県八戸市類家八戸東高校内

ヨ

横井博 963 福島県郡山市開成二丁目三一一

横田きよ子 651 神戸市葺合区二宮町四一四一六

横田健一 606 京都市左京区北白川東平井町二四一一

横田完 631 奈良市山陵町六八

横田利平 634 檀原市内膳町二丁目六一三

横山英 439 静岡県小笠郡菊川町神尾二二三

横山寿夫 545 大阪市阿倍野区共立通三東大谷高校

吉井巖 583 羽曳野市羽曳ヶ丘二丁目一八

吉川井徂子 655 神戸市垂水区西舞子四一七一一八一〇一

吉川貫一 658 神戸市東灘区本山北町四丁目二一四

吉川拓男 581 八尾市北本町三丁目九一三雜喉方

吉田和生 606 京都市左京区下鴨神殿町八

吉田金彦 600 京都市下京区万寿寺通烏丸西入御供石町三六〇

吉田修作 211 川崎市高津区千年三〇五

吉田哲夫 492 愛知県稲沢市堀之内町八六

吉田義孝 463 名古屋市守山区小幡西新五

吉田義視 733 広島市楠木町四丁目崇徳高校内

吉永登 664 伊丹市桜ヶ丘六丁目三一五

吉成孝之 581 八尾市八尾木歯一一

吉野初代 244 横浜市戸塚区和泉町三〇五

吉原シゲコ 615 京都市右京区嵯峨大覚寺門前井頭町三

吉村栄吉 562 大阪村箕面市箕面二丁目九一〇

米沢女子短期大学 992 山形県米沢市丸ノ内二丁目五一一

リ

立教大学図書館 文学部図書室	171	東京都豊島区西池袋三丁目	渡辺 春美	222	横浜市北区太尾町三五 清光ハイツ二三号
立命館大学文学部 国文学研究室	602	京都市上京区河原町広小路	渡辺 護	700	岡山市津島東四丁目八H二一四五
琉球大学 附属図書館	903	沖縄県那覇市当蔵町三丁目一	渡辺 泰	816	福岡市南区井尻美松町三一七
竜谷大学文学部 国文学研究室	600	京都市下京区七条大宮			

ワ

若 浜 汐 子	167	東京都杉並区桃井三二一三
若 林 輝 夫	581	八尾市志紀町西三丁目九一六六
和歌山大学付属 図書館真砂町分館	640	和歌山市真砂町一一
早稲田大学教育 学部国文学研究室	160	東京都新宿区西早稲田二六一
早稲田大学図書館	160	東京都新宿区西早稲田二六一
和田 嘉寿男	630	奈良市藤の木台三丁目一四〇
和田 義 一	915	福井県武生市国高町二一三
和田 幸 子	336	埼玉県浦和市丈蔵九三一
和田 義 人	734	広島市東本浦町二一三
和洋女子大学 附属図書館	272	市川市国府台二丁目三一
渡 瀬 昌 忠	191	日野市多摩平六一三四一三
渡 部 和 雄	852	長崎市昭和町三二一三

『萬葉』

自創刊號
至第八十號

△複製▽全七冊セット

附録Ⅱ「特殊假名遣表」 「萬葉歌人系譜」

A5判 上製本 三十五部限り 頒価一二〇、〇〇〇円
刊行予定 昭和五十二年十月末

近年新しい会員の方が増えましたためか、既刊号の在庫についてのお問合せが多くあり、残部のある既刊号も僅かになりました。そこで、このたび少部数ながら第八十号までを複製し、附録として二点を付しました。萬葉学会の会員に限り、分割のお支払いに应じますので、お問合せのうえ、早めに御注文下さい。

発行所 書肆 大地 廣部重汪

〒603 京都市北区小山堀池町二九

編集後記

○別掲「お知らせ」は、国文学研究資料館からの依頼によるものである。日本学術会議において国文学研究資料センター設置のことが提案され、国会において同館設立の決定をみるまでも、その推進者たちは一方ならぬ力をいたされた。その後、設立の準備業務から設立・開館にまで漕ぎつけ、今回利用業務を開始するまで実に長い道程であった。すでに「館報」「紀要」「国文学研究文献目録」等を通じて、あれこれとその活動を知らされ教示を受けてきたが、関係各位の御苦辛は小子の想察などの到底及ばぬところである。ともあれ、ここに惜しみない拍手を贈り、心から発展を祈り上げる。

○「予告」に掲げたように、本年度大会の細部決定をみた。要項に従って、それぞれ期日までに変更・新規予約のお申出をお願いする。

○最近号また学会大会の「研究発表会」の題目からもお判りのように、当学会員の研究対象は萬葉集のみに限定されてはいない。さきにも記したように、「上代の言語・文学」に関連する各分野の研究論文、研究のための資料」を奮って本誌にお寄せくださるようお願いする。「投稿規定」に示した分量は一往の目安である。

○住居表示変更が各地で引続いて行われ、異動も激しいので、学会員名簿を添えた。誤脱にお気づきの際は些少なりとも、御面倒ながら、別項「お願い」に従って事務取扱

いを依頼している京都の「大地」あてに御一報願いたい。校正の際、編集子宛の私信によって改めたものも少なくない。当誌不着という事故を防ぐためにも、変更・異動に際しては、早急のお届出をくれぐれもよろしくお願いする。
(神堀)

◇お願い◇

1 御投稿、書籍・雑誌の御寄贈は学会本部あて
2 入会申込み、住所変更・改姓等の届出、学費の現金(小切手・小為替)による納入、本誌既刊号の購入等の事務事項は、すべて下記の京都「大地」あてにお願いいたします。

投稿規定

- 1、投稿資格は会員に限る。
- 1、内容は萬葉に関連する各分野の研究論文。
- 1、分量は原則として四百字詰原稿用紙三十枚程度(ただし「黄葉片々」欄は十枚以内)。
- 1、原稿は一切返却しない。採否決定は編集部に一任のこと。
- 1、論文掲載の場合は、本誌二部・抜刷二十部を贈呈する。ただし、余分に入用の時は、あらかじめ申出があれば実費でこれに応ずる。

萬葉學會会則

- 1、本会は萬葉學會と称する。
- 1、萬葉研究者、愛好者は誰でも申込みによって会員となることが出来る。
- 1、会員の研究発表機関誌として季刊「萬

葉」を発行する。

- 1、本会は随時、萬葉に関する見学旅行、文献の展観、研究発表会、講習会、講演会、図書の出版、その他を行なふ。
- 1、会員は、年額二千四百円の会費(誌代を含む)を年度初に納入する。
- 1、本会の事務は

大阪府吹田市千里山東三丁目
関西大学文学部国文学研究室内(郵便番号五六四)
便番五五六四)
昭和三十九年八月二十日印刷
昭和五十二年八月二十五日発行
頒価 六百元
昭和三十九年八月二十日印刷

昭和五十二年八月二十日印刷
昭和五十二年八月二十五日発行

頒価 六百元

〒564 大阪府吹田市千里山東三丁目

関西大学文学部国文学研究室内

電話(〇六)三八八一―二二二一

(内線三九四)

編集・発行 萬葉學會

代表者 小島憲之

振替 大阪二九一四七番

〒603 京都市北区小山堀池町二九

発売事務取扱 大

代表者 廣部重注

電話(〇七三)二一―一三六一

昭和五十二年八月二十五日発行

萬葉

頒価 六百元
送料 二十円